灰羽連盟

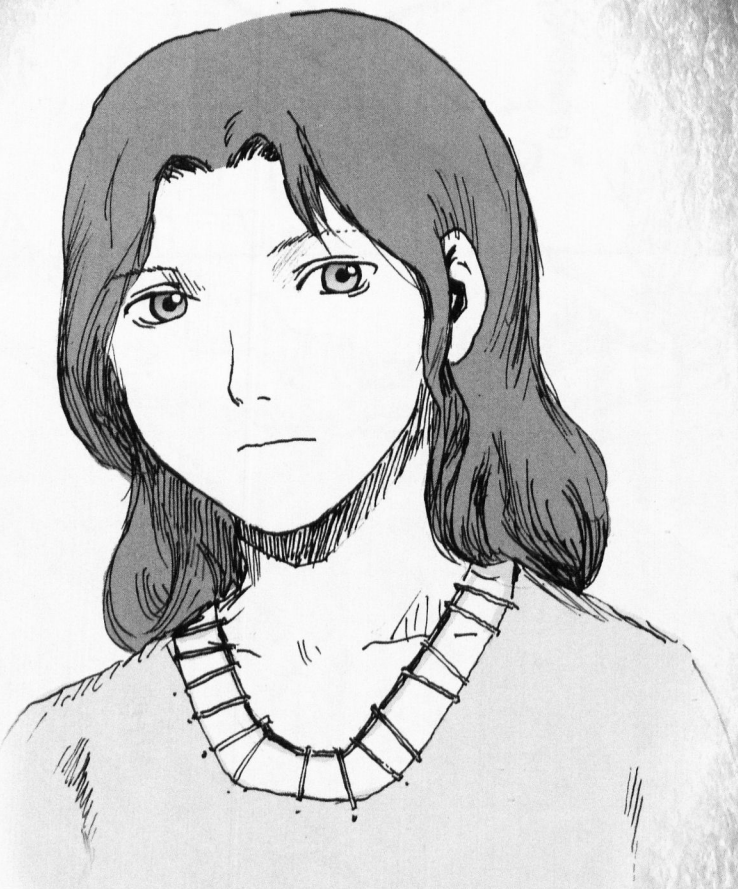
脚本集 第六巻

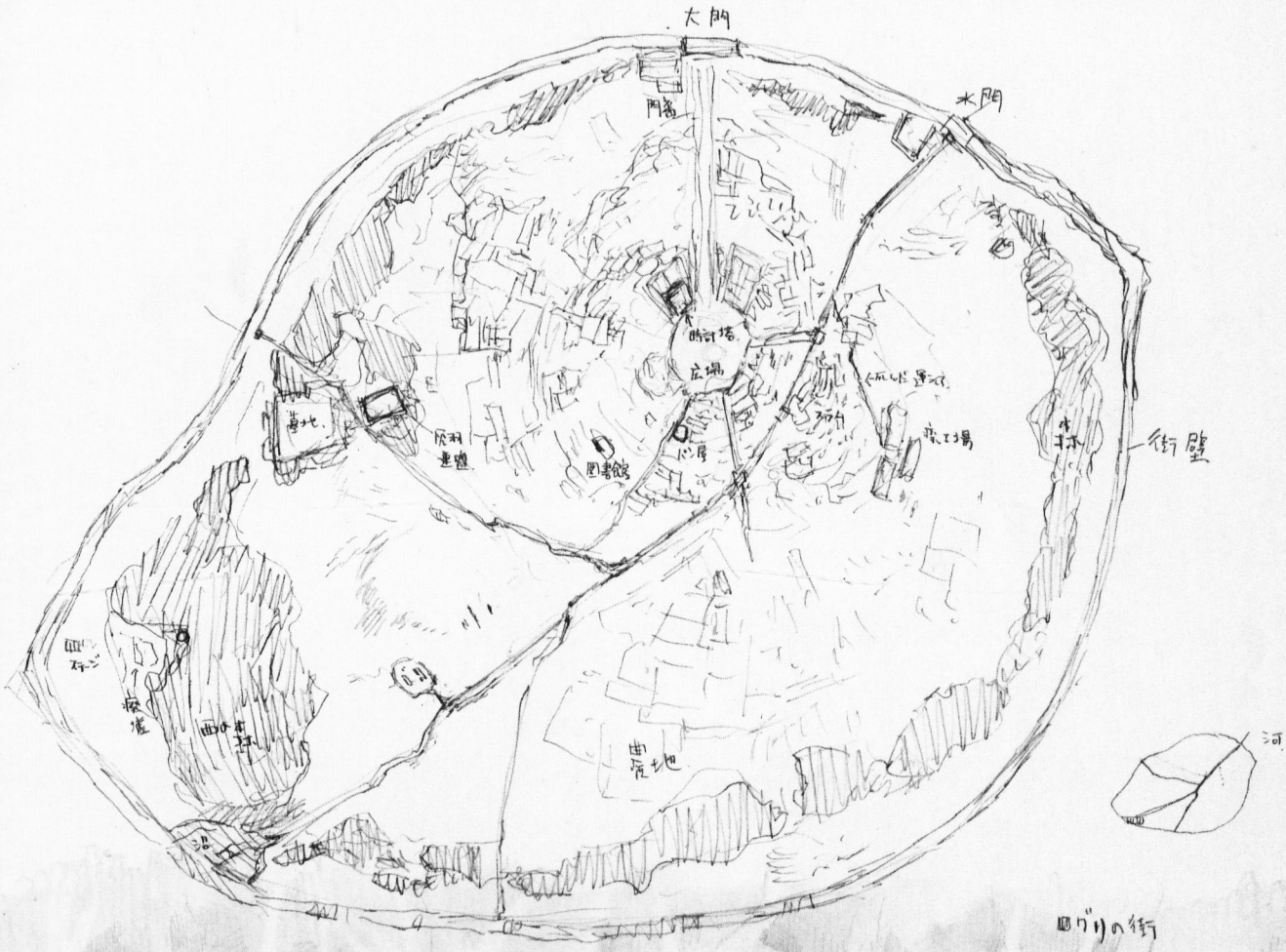
第八話、第九話収録

安倍吉俊

灰羽連盟脚本集

第六卷





灰羽連盟

LA FILLE QUI A DES AILES GRISES

HAIBANE-RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第08話　鳥

第5稿（2002.08.14）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ

灰羽の子供たち

古着屋店員

古着屋の客、男
古着屋の客、女

市場の売り子のおばさん

門番

▲本来は7話のタイトルだった。内容的にも、7話の内容の一部が8話に入ってきている。後半きちんと13話で収まるのか、ずいぶん周囲に心配された。僕自身も微妙に不安だった。

▲市場の売り子のおばさんと門番のシーンは尺の関係でカットされた。

●サブタイトル

●ラッカの部屋

鏡の前のラッカ。ぼんやりとした、どこか虚ろな表情。濡れた羽を鏡に映している。薬は洗い落とされ、赤茶色の雫が、羽の先からぽたぽたと床に落ちている。黒い斑紋は消えているが、切り落とされた羽はまだ痛々しい。ラッカ、羽をぶるるっと震わせ、水滴を払う。手を伸ばし、鏡に映った羽に触れようとする。鏡面に指先が触れる。俯くラッカ。

不意に、ドアをノックする音。

カナ「ラッカ、起きた?」

ラッカ、慌ててソファの背もたれにかけてあった上着を袖を通さずに羽織り、羽を隠す。上着には羽袋がつけられている。

カナ「みんな、クウの部屋にいるから」

ラッカ「……うん、今いく」

ドアの向こうから人の気配が消えるのを身を固くしてじっと待つラッカ。数秒の間。ふっと肩の力を抜く。とっさに羽根を隠そうとした自分に気付き、力なく俯く。

●クウの部屋

ドアを開け、ラッカが入ってくる。上着を着て、背中の羽は羽袋で隠している。既に全員揃っている。ヒカリ、ラッカが羽袋をつけているのをを見て

ヒカリ「気に入ってくれた?」

ラッカ、びくっと身を固くする。ぎこちなく微笑み

ラッカ「う、うん……」

ヒカリ「よかった」

ヒカリ、そんなラッカの様子には気付かず、にっこりと微笑む。ネム、ラッカの方を向いて

ネム「みんな少しずつ、思い出になるものを分けてもらうの」

ラッカ、弱々しく頷く。無意識のうちに、上着の裾をぎゅっと握っている。

レキ「ラッカはベッドでいい？他に何か……」

レキ、そう言いかけ、ラッカの様子に気付き、ちょっと心配そうに眉を曇らせる。ラッカ、部屋の奥の窓縁をぼんやりと見ながら

ラッカ「あれ……」

レキ、ラッカの視線を追って窓縁を見る。蛙の人形が並んでいる。

●ラッカの部屋

レキ、ベッドのマットレスを抱えて部屋に入ってくる。部屋にはベッドの本体が置かれている。棚に、蛙の置き物を並べているラッカ。やはりどこか虚ろな表情。レキ、ラッカに声をかけようとするが、気落ちしているラッカを見て、マットレスをベッドにどさりと置き、窓際へ。カーテンを開けると、空はどんよりと曇っているが、明かりのない部屋の中よりは明るい。レキ、空を見上げる。風がひゅっと吹き込みカーテンを揺らす。レキ、冗談めかした様子で身震いして見せる。

レキ「風が冷たくなってきた。雪が降る前に、まともな寝床が見つかって良かったね」

ラッカ、レキに背を向け、何も言わない。レキ、ため息をつき、話題を変えようと、明るい声で

レキ「羽の具合はどう？」

ラッカ「……ずっとこんな風に、薬を使ったり、羽根を隠さなきゃいけないの？」

レキ「冬は壁の力が弱まるから、悪いものの影響を受けやすいんだ。だから冬の間は――――」

ラッカ、弱々しく頷く。やがて小さな声で

ラッカ「灰羽って、なんなんだろう……」

レキ「？」

レキ、煙草に火を付けようとしていた手をとめ、ラッカ

▲カエル人形がこんなに何度も登場する事になるとは思わなかった。

▲レキ一人に働かせてしまっている事に対して気が回らないくらいラッカの意識は内向している。このあたりも、ひとつひとつの仕草が意味を持って丁寧に描かれていて良かった。

を見る。

ラッカ「壁も、この街も灰羽のためにあるんだって、みんな言う……。でも、灰羽は突然生まれて、突然……消えてしまう」

レキ「……」

ラッカ「私、自分がどうして灰羽になったのか分からない。何も思い出せないままここに来て、何もできないままいつか消えてしまうんだとしたら、私に、何の意味があるの……？」

壁際の棚の前に立つラッカ。窓際のレキ。微妙な距離感。レキ、煙草に火をつけて銜（くわ）え、眼を細めて窓の外を見る。遠い目。呟くように

レキ「私もね、昔、同じことを思った……」

ラッカ、レキを見る。

レキ「意味はきっとあるよ。それを見つけられたら……きっと……」

●オールドホーム、正門

灰色の雲が重く垂れ込めている空。だが、雲は去りつつあり、雲の切れ間から、帯のような陽光が斜めに地上に降りている。子供たちのはしゃぐ声。

レキ「ちゃんと一列になって歩く！！」

橋を越え、街へと続く道を歩く子供たち。そのあとをレキとラッカが並んでついてゆく。歓声を上げながら、おしくらまんじゅうをする子供たち。

子供たち「おーしくらまーんじゅーおーされーてなーくなー」

レキ「ホラ！そんな端っこ歩くと河に落ちるよ！……あーあ、靴どろんこにして……」

顔をしかめるレキ。数歩遅れて、そんなレキをぼんやり見ながら歩くラッカ。ふと顔を上げ、左手の風の丘見る。

ラッカ「……わあ」

風の丘の草原が、緩やかに風になびいている。雲間から射す低い陽光が、草原にまばらな光の斑紋を投げ掛けている。細い葉先は黄金色に変わり、風に揺れるたび、草

▲街へ向かうシーン。とても印象的で、僕が頭に描いていた画に非常に近かったシーンのひとつ。アフレコ時に、初めて風になびく草原と、揺れる草を観た時、恥ずかしい事に監督に『これ、何か特殊な処理ですか？』と聞いてしまった。監督が笑いながら『いや、普通に作画だよ。いい絵を描いてくれる人がいて……』と説明してくれた。

この草の揺れるシーンから、もう画面に釘付けになってしまった。このシーンはこう動いて欲しい、と思っていた通りに、レキやラッカや子供たちがわらわらと歩いていた。

監督的には、キャラがキャラ表に似ていない事を僕が気にするのではないかと気を使ってくれて、『ここはちょっと似てないかもしれないけど、とにかくうまいから、手を入れるならここを直すより、もっと直さなきゃいけない原画がたくさんあるから』と言っていたけど、僕としては、このシーンはこれで本当に良かったと思う。記号的なレベルで言えば、眼の描き方とか、服のしわの入れ方とか頭身とか、微妙に違うのだけど、それ以上にひとつひとつの仕草の中に、個々のキャラクターやこの世界に対する深い理解、あるいは、『自分ならこう表現する』という原画マンの意志があったように思う。

まあ、描き手全員がそういう主張をしてしまったら統率がとれないとは思うので、匙加減の難しいところではありますが。

原を金色の波が渡ってゆくように見える。

レキ「この景色も、もう見納めだね」

ラッカ「えっ？」

レキ「もうすぐ雪が降る、そうしたら一面真っ白になるよ。雲の中にいるみたいにみんな真っ白。そうなるまえに冬支度しないとね」

ラッカ「うん……」

ラッカ、視線を戻す。数歩先をゆくレキの後ろ姿が目に留まる。

ラッカ「雲の中か……。繭の中で見た夢も、雲の中みたいだった」

レキ「ああ、空の夢だもんね」

振り向かず、先をゆく子供たちを眺める風のレキ。

ラッカ「うん……。あのね、私も……そこから先、憶えてないの。私……そこで……とても大切な何かに、出会った気がするのに……」

レキ「……」

レキは振り向かない。だが、後ろで手を組みまっすぐ前を向いたその後ろ姿から、ラッカの言葉に静かに耳を傾けている気配が伝わってくる。ラッカ、再び俯き

ラッカ「ときどき、何かを思い出しそうになるんだけど、怖いの、まるで……」

レキ、先をゆく子供たちに向かって大きな声で

レキ「あんまり先行くなよー！」

子供たちの笑う声。道の先から声が返ってくる。

子供（ショータ）「レキー。はーやーくー！」

軽く手を上げるレキ。道は緩やかな下り坂。ラッカの足取りはいつの間にか重くなっていて、子供たちからずいぶん遅れてしまっている。レキもラッカに合わせて歩幅を緩めていたため、子供たちとは少し間が開いている。

レキ、やはりラッカの方を振り向く事なく

レキ「……私が傍にいるよ。……私は、クラモリを失ったせいで道を踏み外しちゃったけど、私は何があっても、きっとラッカの傍にいるから」

4

▲今読み返してみると、ずいぶん無茶な注文をしている。小説を描くようなつもりで描いてしまっているが、絵に表れない感情表現をするなら、具体的にどうするのか書かないといけない。まあ、あまりに細かく書きすぎてもコンテや演出の枷になって良くないのだろうけど。

レキ、なんとなく照れくさそうに咳払い。道の先で、子供の一人が押し合いに負けて転んでいる。びゃーっと泣き声。レキ、大きな声で子供たちに向かって

レキ「ああ、もう！だから危ないって言ったろ！！」

レキ、走り出す。

レキ「道の真ん中をまっすぐ歩け！まっすぐ」

ラッカ、ちょっと微笑み、空を見上げる。近くの木立のやや飛び出した枝に、数羽のカラスがとまっている。何度も見た光景。やはりラッカをじっと見下ろしている。ラッカの顔から笑いが消える。レキの後を追って走り出すラッカ。何度か不安そうに木立を振り返る。カラスはじっとラッカを目で追っている。

●古着屋

古着屋の前。店の前の路地にも、服や小物が並べられている。古着屋の店員の威勢のいい、だがどこかとぼけた声。

古着屋「全員、せいれーつ！！」

●店内

狭い店内一杯に並んだ子供たち。きちょうめんにびしっと気をつけしている子もいれば、隣の子に茶々を入れている子もいる。全員お揃いの小豆色の外套を着ている。古着屋、顎髭をさすりながら軍隊の教官風のしかめっつらで子供たちをひとりずつ睨んでゆく。

古着屋「まわれー右！」

くるっと回る子供たち。右回りの子もいれば左回りの子もいる。古着屋、頭を掻きながら

古着屋「あーあ。……裾丈バラバラ！縫い直しだな、こりゃ」

レキ「……」

レキ、片手で目を覆い、勘弁してくれ、という仕草。古着屋、飄々とした感じで子供たちの外套を脱がせながら

▲初稿では、カラスは出てこなかった。改稿はほとんど詰める作業だったが、ここは後半、ラッカを井戸に導くカラスたちの存在が生きてくるように、伏線として追加した。

電線が風に揺れて、カラスがかすかに上下していたり、芸が細かい。

▲初稿では、もう少し長くやりとりがあったが、入りきらなかった。

▲こういう細かい仕草まで指定している場面は、実際に映像として頭に浮かんでいるシーン。

古着屋「そんな顔するなよ。同じ型を10着揃えただけでも勲章モンだろ」

レキ「……まあね。しゃあない、手伝うか。……ラッカ、冬服選んでてよ。すぐ済むから」

ラッカ、頷く。子供たちとレキ、古着屋、ドアの向こうに消える。突然静かになった店内。ラジオも止まっており、無人の店内は薄暗く、うら寂しくもみえる。

棚に並んだ服をぼんやり見るラッカ。隣室からはミシンの音がかすかに聞こえている。

隣室から物音。次いで壁越しの古着屋の声。

古着屋「コラいたずらすんな、怪我すっぞ……あっイテテ髭ひっぱんなって……この!」

ガタガタっと言う音。レキの声、ほとんど聞き取れない。

古着屋、それに答えて

古着屋「そーする。じゃ、あと頼むわ」

ドアを開け、頭を掻きながら、古着屋が出てくる。ばつが悪そうに

古着屋「子供はどーにも……」

とぼやきながら、カウンターに座り、ヘッドフォンを掛けようとする。暗い顔でぼんやりと服を見ているラッカに気付き、ヘッドフォンを首にかけて、肘をつき、ラッカを眺める。

古着屋「街には慣れた?こっちの冬、早いんでびっくりしたでしょ」

ラッカ、曖昧にこくんと頷く。古着屋、ラッカの元気のなさに少し繭をひそめる。

暗い表情のまま、黙々と服を選ぶラッカ。古着屋、少し怪訝そうにラッカを眺めている。ラッカ、長袖のワンピースを手に取り

ラッカ「……これ」

古着屋「あいよ」

古着屋、受け取った服をラッカの前にかざして、明るい調子で

古着屋「靴も合わせようか」

ラッカ「え?でも……」

▲そんなにヒゲは長くない。細かい事だけど、無精ヒゲみたいなものは、イラストだと細かい線を適当に入れるだけだけど、アニメで動かす事を考えたら結構面倒なのかもしれない。

ちょっとした描き方の違いで見え方にかなり差が出てしまうので、古着屋のヒゲも、話数によって印象が微妙に違っていた。

古着屋「サンダル履きじゃ寒いでしょ。もうじき雪が降るし」
ラッカ、恥ずかしそうに半歩あとずさる。季節外れでいかにも寒そうな爪先。古着屋、棚から少し丈のあるブーツを取り出し、ラッカの前にとん、と置く。
古着屋「これなんかどう?」
ラッカ「あの、でも……」
古着屋「遠慮はナシ。灰羽は元気にニコニコしててくんなきゃ」
ラッカ「……どうして?」
古着屋、しゃべりながら辺りをきょろきょろ見回し、何かを捜している。やがて、カウンターの裏にしゃがみ込み、姿を消す。靴の箱を探しているらしく、空の紙箱がぽいぽいとカウンターの脇の床に投げ出される。
古着屋「どうしてって……うーん。なんていうか、ガキの頃からお袋に、灰羽は天のカミサマに祝福を受けた者、って教わってきたからさ。縁起物……っていったら失礼か、はは」
ラッカ「私……祝福なんて……」
カウンターの向こうから古着屋の笑い声。
古着屋「ああ、そんなの街の人間が勝手に思ってるだけの事。気にする事ないって。……よし、と」
古着屋、赤いリボンの巻かれたきれいな箱を持って立ち上がる。それをカウンターの上の紙袋に入れ、服の入った袋と合わせて二つの袋をラッカに差し出す。
ラッカ「でも、私、手帳、あと1枚しか……」
古着屋「ああ、じゃ、今は1枚でいいよ。新しいの、すぐもらえるんでしょ?」
ラッカ「私、まだ、仕事見つけてないんです。だから……」
古着屋、ラッカの深刻な表情と対照的な苦笑い。
古着屋「あはは、確かにそりゃもらいに行きづらいわな。ま、なんとかなるさ。(励ますように)いろいろ大変だと思うけど頑張りな。ウチがもうちょい歴史のある建物だったら雇ってあげられるんだけどね」
俯くラッカ。両手をぎゅっと握り、首を横に振る。
ラッカ「駄目なんです。……私、出来損ないの灰羽だから……」

▲シナリオの文章上では少し演技過剰だった。実際の映像では、余計な動作をうまく端折って、いい感じになっていた。
手間のかかる細かい演技は、重要なシーンに持ってきて、ある程度流していいシーンは作業的にも軽くつくらないと、大切なシーンが生きてこない。ここはある程度シンプルにするのが正解だった。
ものすごく余談だけど、昔、某超大作RPGをプレイしていた時にそう感じる事があった。全てのシーンがものすごい労力と人力を使って一分の隙もなくクオリティが高かったせいで、重要なシーンがさっぱり引き立たず、ものすごいグラフィックの連続だったにも関わらず、結果的にどのシーンも全然印象に残らなかった。もったいないなあと思った。
どうでもいいシーンはもっと質を下げれば、トータルの完成度は数段高いものになったはずなのに……、と思ったが、大作はそういうメリハリが許されなかったりするんでしょうね。難しいもんです。

古着屋「え？」
怪訝そうな古着屋。突然、ガラン、と音を立てて、若いカップルが入ってくる。男は片手に店の前に並べられていたシャツをハンガーごと持っている。
男「……これ」
古着屋「あ、はいはい」
古着屋、渡しそこねたラッカの紙袋を脇に置き、男からシャツを受け取り、値札をあらためている。女、ラッカに気付き
女「わー、灰羽ちゃんだ。かわいー」
駆け寄ってくる女。びくっと身を引くラッカ。女、そんなラッカの様子に気付きもせずはしゃいでいる。光輪を指でつついて
女「うわー、本物だ～。（男の方を向き）ね、灰羽ちゃんだよ。ラッキー。今日絶対いい事あるよ」
男、カウンターの前で首だけひねって
男「馬鹿、やめろよ。迷惑がってんじゃん」
女「えーそんなことないよ～。ね」
女、無遠慮に羽袋に手を伸ばす。
ラッカ「触らないで！」
小さな、囁くようなかすれた声だが、悲鳴のように鋭く切迫した調子があり、女は驚いて手を止める。
ラッカ、羽をぱっと翻（ひるがえ）して、そのまま店から駆け去る。
呆気にとられるカップル。古着屋、袋を掲げ
古着屋「お、おい、これ――――――！」

●街路

とぼとぼと歩くラッカ。
遠くに大門前広場が見え、その先に壁が見える。広場に続く階段にさしかかると、明らかに混雑が増す。
背後からクラクションの音。ラッカ、意識が内向してぼんやりと足元の地面を見ながら歩いていたが、その音に

▲この辺りの絵は、僕のテイストにかなり近い。
今気づいたけど、この『灰羽ちゃん』女と連れの男は、僕はデザインしなかった。なんか絵の感じが近かったので、ラフくらい描いたような気になっていたけど、全然お任せにしていた。

▲コンテを切った助監督の大森さんから、このシーンを丸々カットしたい、と申し出があった。初稿の補足の部分でも書いているけど、ここは元々もっと長いシーンで、門番と門番の犬には、わりと重要な役割があてがわれていた。しかし、尺の関係で詰めているうちに、重要な会話の部分がなくなってしまい、ただのシーンの繋ぎになってしまっていた。
ここまで短くしてしまったら、確かにすっぱりと切ってしまった方がテンポは良かったと思う。

はっとして振り返る。荷車つきバイクが、カボチャのような大きな植物の実を積んでラッカのすぐ背後にいる。ラッカ、背後に気を取られながら慌てて道の端に寄ろうとし、通行人にぶつかる。

ラッカ「あっ、あ……」

しどろもどろになり、謝る事もできず、頭を下げて逃げるように走り去るラッカ。

大門前広場に入る直前の幅の広い道では、トーガの運んできた交易品を中心とした市が立っている。人込みの中、長テーブルの上に雑多に積み上げられた品物を眺めるラッカ。缶詰めや瓶詰め、固形燃料、大量の布、蔓を編んで作った籠など、実用的なものから、得体のしれない干し肉や、船の錨、車のナンバープレートのようなものなど、変なものもある。トーガの持ち込んだものと、交換のために街の人間が持ち込んだものの余りもあって、市は活気づいている。路肩でシタールのような楽器を演奏している者、肉屋の客寄せのための檻に入れられた子豚とそれを眺める子供たち。ラッカは、トーガの持ち込んだ雑貨の山に目を奪われる。それは、クウの帽子のように見える。ラッカ、近寄ろうとするが、人込みに阻まれる。

ラッカ「すいません、通して下さい！」

人波を掻き分け、驚く人達を押しのけるようにして雑貨の山にたどり着く。雑貨の山から帽子をつかみ、引っ張り出す。耳当ての辺りは似たデザインだが、引っ張り出してみると、帽子ではなく、ニット地のフード付き上着のフード部分。みるみる落胆の表情。

ラッカ「違う……クウのじゃない……」

売り子の太ったおばさんが、が怪訝そうに声をかける。

売り子「買うのかい？」

ラッカ「いえ……あの、すいません」

靴を戻し、あたふたとその場を離れようとするラッカ。突然背後から犬の咆哮。驚いて振り返ったラッカのすぐ脇を、突進してきたドーベルマンが飛びすぎる。ラッカ、バランスを崩し、その場に倒れる。そのはずみに、片方

▲何かで巨大カボチャの映像を観たのだと思う。びっくりニュースか、オールズバーグのパステル画の絵本『名前のない人（The stranger）』だろうか。どうでもいいが、これも村上春樹訳ですね。これはさすがに偶然ですが。

の羽袋が外れて地面に落ちる。犬はすばやく身を翻し、ラッカの周囲に向かって荒々しく吠えまくる。竦み上がり、息もできないラッカ。守衛所から息を切らせて門番の老人が駆けてくる。

門番「はぁ、はぁ、一体なんだ、鉄砲玉みたいに……飛び出しよって……」

やっと追いついた門番の老人、地面に落ちた手綱（首輪から繋がっている革ひも）を拾い上げて自分の手に厳重に巻き付け、ぐい、とひっぱる。犬はそれでやっと鳴き止むが、まだ咽を鳴らして周囲を威嚇している。最初は何に対して吠えているのか分からなかったが、犬に驚き、周囲の人達が数歩引いたため、犬がラッカに向かって吠えたのだという事がなんとなく分かる。周囲の人の目がラッカに集まる。

門番「――――――いきなり飛び出したんで、何か悪いものでも出たのかと思ったが……」

門番、ラッカを見る。ラッカは震えていて声もでない。

門番「いや……申し訳ない。怪我はないかな？」

周囲に頭を下げる門番。落ちたラッカの羽袋に気付きそれを拾い上げる。汚れを払おうとすると、羽袋の袋の中から黒い羽が一枚、ふわりと門番の手の上に落ちる。ラッカ、それを見てはっとする。

ラッカ、門番の差し出した羽袋をぱっと引ったくるように受け取り、背中を見せないように数歩あとずさったあと、身を翻して走り去る。驚く門番。手のひらの黒い羽をつまみ上げ、呆然としている。

●風の丘

夕刻。緑の褪せた、黄金色の草原。低いうなりをあげ、ゆっくりと回る風車。とぼとぼと歩いているラッカ。羽袋は手に持ったまま。片方の上着の羽袖から、羽が見えていて、遠目にも分かるくらいはっきりと、数枚の羽が黒く色を変えている。風車のふもとに立ち、空を見上げ

▲このあたりは、カットされたシーンに少し反映されている。

▲羽袋をなくしてしまわないように意識した。このシーンで羽袋を無くしてしまって、次の話数で何食わぬ顔で復活しても、何か言う人がいるとは思わないけど、今回は前の話数でヒカリたちにつくってもらったものなので、ラッカ自身もとっさの場合でもその事を意識すると思い、とれてしまった羽袋を拾うシーンを入れた。このシーン自体はカットされたが、カット後の繋ぎのシーンでもそのやりとりは残されている。

る。威圧感のある大きな羽根は暮れなずむ空を背景に、ぼうっとした不確かな影の塊のように見える。風が、草原を波打たせながらラッカの元へ打ち寄せ、吹き抜けてゆく。

風向が定まらず、ギギギ……、と軋るような音を立てて角度を変える風車。ラッカ、風車のひとつにもたれ、顔を覆って泣き出す。

ラッカ「私の居場所なんてどこにもない……」

ひときわ大きな風が、草原とラッカの上着をはためかせ、過ぎ去ってゆく。ラッカ、ずるずるとしゃがみ込む。大きな風車の支柱に対して、身を折るようにしてすすり泣くラッカの姿はあまりにも小さく、か細い。

ラッカ「……わたしなんて……いなくなっちゃえばいいんだ――――」

不意に、カラスの鳴き声。はっとするラッカ。風車の支柱の端に、カラスが留まってこちらを見下ろしている。知性があるかのような瞳。さらに1羽のカラスが飛んできて、近くの木立に留まる。戸惑うラッカ。突然、過去に何度かあった、目の前にカラスが現れたシーンがフラッシュバックのように脳裏に甦る。門の前でトーガを見かけた時、カナとごみ捨て場にいた時、時計台のテラスから見た壁を越える鳥。今朝、木にとまっていた鳥、そしてクウの巣立ちを告げた、あの鳥。

ラッカ「……私を……呼んでる?」

最初のカラスが一声鳴く。それに応じるようにもう1羽が鳴く。合唱するように数度それを繰り返し、突然2羽のカラスは飛び立つ。鳴きながら、ラッカの頭上を数度旋回し、飛び去る。それを目で追うラッカ。カラスは西の森へと消える。

ラッカ「あっちは……西の森……?」

●西の森

森の入り口に立つラッカ。一瞬不安に駆られ躊躇する。

▲文章上ではリズムに乗ってぼんぼんと書いてしまっている情景描写だが、映像では、風車など、デジタル処理も含めて、大変な手間をかけてつくられている。それを考えるとシナリオの責任は重いなあ、と思いつつ、こういう描写のひとつひとつを大切に拾ってもらえた事に改めて感謝。

薄暗い森の中を窺うようにしていると、不意に、オールドホームの鐘が鳴る。振り返るラッカ。
ラッカ、ほっとし、意を決して森に分け入ってゆく。鐘はゆっくりと5回鳴る（時間がかかるので5回鳴った事を確認させる必要はありません）。
森の中。歩いてゆくラッカ。木漏れ日がすっと弱くなる。陽が陰り、風が梢を揺らす。とぎれとぎれにしか見えない空を不安げに見上げる。

●森

森の中。不安げに辺りをきょろきょろ窺いながら進むラッカ。迷い始めている。ふと、近くの木にカラスがとまっているのを見つける。カラスはラッカが気づいたのを待っていたかのように、一声鳴いて、森の奥へと消える。
ラッカ「呼んでるんだ……私を」
薄暗い森の奥へ進むのを躊躇するラッカ。遠くで鐘の音。
ラッカ、一瞬不安そうに背後を振り返るが、カラスを追って森の奥へ。

12

●井戸

獣道のような暗く細い道を歩くラッカ。前方が少し開けていて、光が差している。
15メートル四方ほど、森が途切れていて、まるで木々が何かを恐れてあとずさったかのよう。傾きかけた陽射しが、森の中のその領域を浮かび上がらせている。中心には、大きな古い井戸がある。井戸の縁やつるべに、カラスが留まり、じっとこっちを見ている。ラッカ、恐る恐る1歩踏み出す。ふ、と吐いた息が、白く染まる。
ラッカ「空気が……違うみたい……」
ラッカが近づくと、カラス達は一定の距離をとって離れた場所に移る。だが、飛び去りはしない。
ラッカ、井戸の中をのぞき込む。かろうじて枯れた井戸

▲この話数の森の描写は、黄味がかった感じも含めて、非常にいい感じ。地面に落ちた葉の表現など、細かくやってくれている。西の森自体が、見た目に特殊な樹が生えているとか、分かりやすい特殊性はないが（壁の近くは少し特殊だけど）、特別な場所、という設定のため、樹の描写がおざなりだとすごく安っぽくなってしまう。そういう意味で、ここはとてもうまくいっている。

の底に、なにか白いものがかすかに見える。

ラッカ「何かある……」

ラッカ、自分を遠巻きに取り囲んでいるカラス達に

ラッカ「これを見せたかったの？そのために……私を呼んだの？」

カラス達、反応はなく、ただじっとラッカを注視している。

ラッカ、井戸を覗くが、暗くて何も見えない。どうしたものか迷ううちに、井戸の端に取り付けられた、細い金属のハシゴに気づく。コの字型の楔を打ち込んだもの。恐る恐る井戸の縁に上り、錆びた梯子を伝って、井戸の底に降りていく。

しんとした暗い井戸の底。何かが見える。ぼんやりとした闇の中心に、漂白したような白と、闇よりも暗い黒。

ラッカ「あれは……」

目を凝らし、身をひねるラッカ。それが黒い鳥の死骸であるとかろうじて判別がつき、もう一段降りようとした足先の梯子が、何の抵抗もなくぽきりと折れる。

ラッカ「！！」

虚を突かれ、手を滑らす。ラッカの体は暗い井戸の底へ消える。

●夢の再生

暗闇。遠くで激しい雨音がしている。きゅっ、きゅっ、と、リノリウムの床を歩く足音。室内らしいエコー。かちん、と鍵を開ける音。ぎぃぃぃぃという重い鉄扉を開ける軋んだ音。雨音が一気に大きくなり、同時に空間が開けた感じにエコーが消える。ぴしゃ、ぴしゃ、と濡れた石の床を裸足で歩く足音。雨音は次第に大きくなる。金属の擦れるような微かな音。雨音が最高潮に達した瞬間、スイッチを切るように全ての音が消える。今よりも少しだけ幼い、ラッカの擦れた囁き声（風の丘のシーンのセリフの回想に聞こえないように注意して下さい）。

ラッカ（モノローグ）『……わたしなんて……いなくなっ

▲ああ、ハシゴと梯子、どちらかに統一するべき。

ちゃえばいいんだ――――――』

暗く重い、灰色の空を、ラッカは音もなく落ちてゆく。強い風に揺さぶられ、目を覚ますラッカ。クウのくれた上着を着て、光輪と羽もある。上着も羽も、泥で汚れている。風圧に逆らい、なんとか目を開けるラッカ。目を開けてしまうと、風は強いが苦しくはない。風に服はなびいているが、目を開くことはできる。ラッカ、辺りを見回し

ラッカ「いつか……どこかで見た……。夢？……でも……寒い……」

無意識に風を避けようとかざした手が泥で汚れている。ラッカ、はっとして、緩く握っていた手を開く。泥に混じって、黒い鳥の羽がこびりついている。眼を見開くラッカ。第1話冒頭の、空を落ちるラッカと鳥とのやり取りが、記憶の中に断片的に蘇る。

ラッカ「そうだ……。あの時――――――」

1話冒頭の、ラッカの袖をつかみ、必死にラッカを引きとどめようとするカラスの姿が蘇る。重みに耐えきれず、脚を離してしまうカラス。見る間にラッカとの距離が離れてゆく。

はっと我に返るラッカ。手のひらの黒い羽が手から剥がれ、空に舞う。ラッカ、虚空に手を差し伸べ、何かを叫ぶが、それは声にならない。雲が途切れ、視界が開ける。だが、見えてきたのは地上ではなく、地平を覆うほど巨大な井戸。ぱっくりと口を開けたその闇の中に、ラッカは吸い込まれるように落ちてゆく。

暗転。

●井戸の底

ぽた……ぽた……と、どこかで水音がしている。暗闇の中に、光輪がぼうっと浮かんでいる。

ラッカ「……う……」

▲雲を抜けて、表れた井戸のイメージが、頭にあったものそのままで、ちょっとびっくりした。

光輪がかすかに震える。闇に眼が慣れるように、次第に情景が見えてくる。井戸の底にうつ伏せに横たわるラッカ。折れた梯子の断片がいくつか散らばっている。力なく投げ出された腕がぴくりと動く。肘をつき、身を起こそうとするラッカ。頬や髪が泥で汚れている。ぼんやりと霞む目で手を見ると、その手は無意識のうちに土を掻き、湿った泥の塊を握りしめている。ゆっくりと手を開く。

――――――手のひらには黒い鳥の羽が握り込まれていた。

ラッカ「あ……」

眼を見開くラッカ。眼の焦点が合う。汚れた手のひらの向こうに、羽を開いた状態で半ば白骨化している鳥の死骸が横たわっている。羽毛は散っているが、風切羽根は、礫にされたかのように開かれた両の尺骨に、原形をとどめる程度には残っている。羽先の付近の土が、ラッカの手の形に浅く抉られている。枯れ葉と枯れ枝の中、風雨に洗われた白い頭蓋が闇の中にぼうっと浮き上がって見える。瞳のない眼窩、その二つの闇が、じっと静かにこちらを見つめている。弾かれたように身を起こすラッカ。ラッカは身を引こうとするが、背後の石壁に背が当たり、あとずさる事はできない。手探りで背後の石壁に手をかけ、立ち上がろうとする。

ラッカ「痛っ……!」

ラッカ、足を押さえてよろめき、肩から壁にもたれる。半身を折り、両手で脛を押さえる。足元に転がる折れた梯子に気づき、頭上を見上げる。足元から2メートル強の所から、石壁の色が明らかに変わっている。そこから下の梯子は、赤く錆びており、大半が折れてなくなっている。一番下の梯子は、ラッカの肩の辺り。そこより下は、壁の石組みが曖昧になっている。ラッカ、痛む足をかばいながらその梯子に手を伸ばす。梯子は、ラッカの指が触れた瞬間、ぽろりと崩れ落ちる。もう一度上を見上げるラッカ。

ラッカ「ここ……ずっと水の下だったんだ……」

▲何とか簡潔に説明しようと、骨格図鑑を片手に書いてしまった。自分が調べなければ書けないものは、読む側も調べなければ意味が通らない、という当たり前の事に気が回っていない。大切なシーンで、変に力が入ってしまっている。

▲状態を説明するために、井戸の断面図をメモ描きしたものがあったはずなんだけど、見つからない。残念。

絶望的な表情で立ち尽くすラッカ。だが、井戸の底の静謐な空気に、次第に落ち着きを取り戻す。鳥の死骸には苦悶した跡はない。静かな死。

ラッカ「どうしてだろう。怖いはずなのに……」

ラッカ、片足を引きずり、鳥の死骸に歩み寄る。黒い羽が散らばる死骸の傍らに跪く。

ラッカ「……あなたが、私を呼んだの？」

骨は答えない。

ラッカ「……鳥の姿をしているけど、ずっと昔、どこかで、私、あなたを知っていた気がする……」

●ゲストルーム。夜8時頃

ドアを開け、レキが駆け込んでくる。ゲストルームには、カナ、ヒカリ、ネムが落ち着かなげに、思い思いの場所に座っている。

レキ「ラッカは？戻った？」

ベッドの端に、所在なげに座っていたカナ、レキを見返し、首を横に振る。

カナ「そっちは？」

レキ「目ぼしい場所は回ってみたけど……」

カナ「なあ、やっぱりこれは……」

レキ、カナの言葉を遮り

レキ「クウの時とは違う。ラッカはまだ灰羽として定まってもいなかったんだし」

ヒカリ「どうしたんだろう……」

ネム「最後に会ったのはレキ？」

レキ、頷く。

レキ「……すまない。私がついてたのに……」

カナ「ラッカは保護者がいる年じゃないって！それより探しに行く？待つ？」

ネム、ベランダから外を見て

ネム「まだ、外出してもおかしくない時間だけどね……。でも、夜中になって慌てるくらいなら、今行きましょ。取り越し苦

労でもいいじゃない」

カナ「よし、決まり！」

ぱたぱたと部屋から出てゆくヒカリとカナ。ネム、後に続こうとして、ふと後ろを振り返る。俯き、立ち尽くしているレキ。

ネム「まさか……ラッカがこのまま家出しちゃうなんて考えてないわよね？」

レキ、苦い顔で微かに笑い

レキ「ラッカは私ほど馬鹿じゃないさ……。でも、似てるんだ」

ネム「……あの時と？」

レキ、顔を歪める。

ネム「……ごめん」

レキ「いいよ。……行こう」

●井戸の底。かなりの時間が経過している

ラッカ、手で井戸の底の土を掘っている。

ラッカ「ごめんね。こんな事しかしてあげられなくて……」

骨を埋め、落ちていた木の枝を墓標のように挿す（十字はつくらない）。

ラッカ「私、自分の名前も思い出せないの。灰羽はみんなそうなんだって。だから私、あなたが誰なのか、思いだせない……。ただ、大切な誰か、としか……」

疲弊し、墓の傍らにに座り込むラッカ。膝を抱え、泥だらけの頬を膝に載せる。

ラッカ「……私、いつも独りぼっちで、自分がいなくなっても、誰も悲しんだりしないって、思ってた。……だから、消えてしまいたいって……思った……」

墓標は何も答えない。

ラッカ「でも……あなたはずっと傍にいた。鳥になって、壁を越えて、私が独りじゃなかったんだって伝えようとしてくれたんだね……」

墓標を見下ろすラッカの目の前に、白い雪が舞い落ちてくる。はっとするラッカ。頭上を見上げると、重たく湿っ

▲特定の神様、宗教のない、という設定のため。

原稿用紙200字詰め70枚

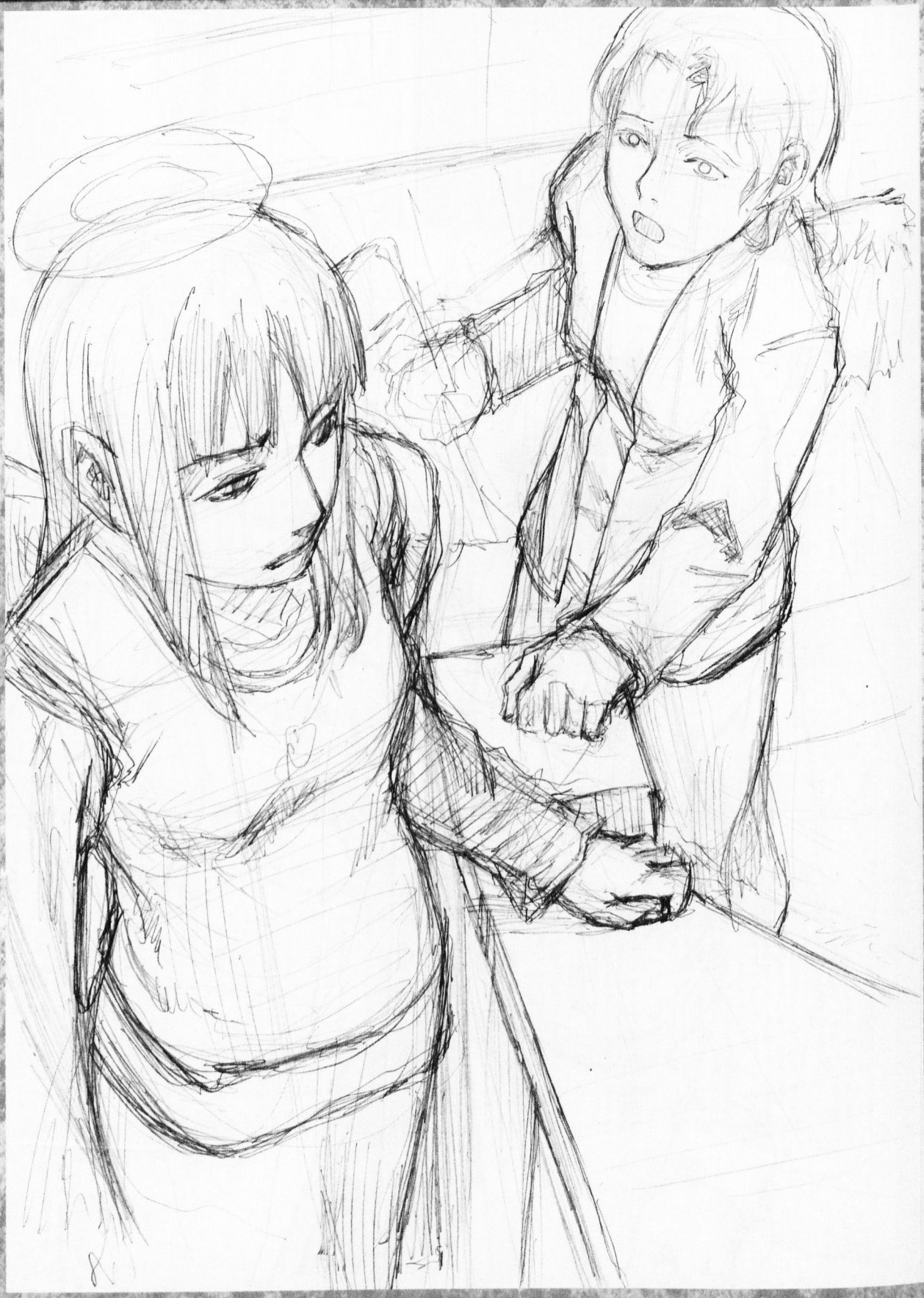
た雪の粒が、海の底に積もる微生物のように、音もなく舞い降りてくる。ぎゅっと膝を抱き、固く目を閉じるラッカ。

ラッカ「私……」

18

▲まさかこの直後にあんなOPが入るとは……。

■DVDジャケット下絵。描くキャラは決まっていたが、使う場面と構図で少し悩んだ。
次ページは決定稿の下描きとトレスアップされた線画。線画自体はうまくまとまったかなと思ったが、色をつけて、少し空間が弱くなったかもしれない。



灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第08話 鳥

第1稿（2002.08.06）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ
灰羽の子供たち（声はダイ、ショータ、タクの3名。歓声等で10人の声が必要な場面あり）
古着屋店員
古着屋の客、男
古着屋の客、女
市場の売り子
門番

●サブタイトル

●ラッカの部屋

鏡の前のラッカ。濡れた羽を鏡に映している。薬は洗い落とされ、黒い斑紋も消えている。切り落とされた羽も、やや目立たなくなってきている。ラッカ、羽をぶるるっと震わせ、水滴を払う。羽に手を触れ、少し安堵した表情。ドアをノックする音。

カナ「ラッカ、起きた？」

ラッカ、慌ててソファの背もたれにかけてあった上着に袖を通す。上着には羽袋がつけられている。

カナ「クウの形見分け、始めるってさ」

ラッカ「……うん、今行く」

●クウの部屋

ドアを開け、ラッカが入ってくる。既に全員揃っていて、クウの形見分けが始まっている。ネム、ラッカの方を向いて。

ネム「みんなでいくつか、思い出になるものをもらって、あとは鍵を締めてしまおうと思うの。次にこのドアを開くのは、きっと何年も先、クウの事を知らない誰か。私達が生まれてくる前の、ずっと昔の灰羽達も、きっとそうしてきたんだと思うの」

ヒカリ「いいよね、ラッカ」

ラッカ、ぎゅっと拳を握り締め、だが気丈に頷く。

レキ「ラッカはベッドでいいの？手伝うよ」

ラッカ、窓際に行き、蛙の置物を手に取る。

ラッカ「これも、いい？」

頷くレキ。ラッカ、クウの名前の蛙に向かって

ラッカ「引っ越しだよ。みんな一緒だから。いいよね、クウ」

●ラッカの部屋

▲決定稿とは、少しラッカの感情の疲れ方が違う。こちらの方が落ち着いている。

レキ、クウのベッドを並べている。ラッカ、洗面台の脇の棚にカエルを並べる。まだ悲しげなラッカ。レキ、ベッドの据付けを終え、ラッカに声をかけようと振り向き、気落ちしているラッカに気付く。

レキ「ラッカがいいって言うまで、クウの部屋、開けておいてもいいんだよ」

ラッカ、レキに背を向け、何も言わず、首を振る。レキ、ため息をつき、話題を変えようと、明るい声で

レキ「羽、よくなったね」

ラッカ「……ずっとこんな風に、薬を使わなければいけないの？」

レキ「悪くなるのは、大抵は冬の間だけ。冬は壁の力が弱まるから、悪いものの影響を受けやすいんだ」

ラッカ「みんなに隠し事をしてるみたいで、いやだな……」

レキ「みんなには何も言っちゃ駄目だよ。心配させるだけだし。それに、羽が黒いと街で仕事を見つける事もできない」

ラッカ「そうなの？」

レキ「どうしたって不吉に見えるからね……あ」

窓の外、雪が降り始めている。

ラッカ「雪だ……」

レキ「いよいよ本当に冬が来たんだな……」

ラッカ「積もるの？」

レキ「最初の雪は地上の熱を奪うだけで、すぐに消えてしまう。深く積もるのは、その次に降る雪」

レキ、窓から手を出し、手の甲で雪を受ける。雪はすぐに溶けて、小さな水滴に変わる。レキ、呟くように

レキ「冬は、なんだか辛い思い出ばかりだ……。クラモリが行ってしまったのも、深い雪の日だった」

ラッカ「壁の向こうはどうなってるのかな。巣立ちの日が来たら、壁の向こうで、みんなもう一度会えるのかな？」

レキ「私には分からないよ。……きっと私には……」

ラッカ「……レキ？」

レキ、はっとする。努めて明るく

レキ「そうだ、雪がやんだら冬服を買いに行こう。チビ共の外套（がいとう）、古着屋に頼んどいたんだ」

ラッカ、何かを言いたそうにするが、結局なにも言えない。

●オールドホーム、正門

灰色の雲が重く垂れ込めている空。だが、雪は去りつつあり、雲の切れ間から、帯のような陽光が斜めに地上に降りている。子供たちのはしゃぐ声。

レキ「ちゃんと一列になって歩く！」

橋を越え、街へと続く道を歩く子供たち。そのあとをレキとラッカが並んでついてゆく。雪は既に止んでいる。積もる事こそなかったが、道は黒く湿っていて草陰にところどころ雪が残っている。

子供（ダイ）「わー。シャクシャクする」

ダイとショータ、はしゃぎながら道の端の残雪を踏んで歩く。

レキ「ホラ－そんな端っこ歩くと河に落ちるよ！……あーあ、靴どろんこにして……」

顔をしかめるレキ。笑うラッカ。ふと顔を上げ、左手の風の丘見る。

ラッカ「……わあ」

風の丘の草原が、緩やかに風になびいている。雲間から射す低い陽光が、草原にまばらな光の斑紋を投げ掛けている。細い葉先が揺れるたび、葉についた水滴が光を反射し、細かい光の粒が、草原を渡ってゆくように見える。

レキ「こんな景色も、もう見納めだね」

ラッカ「えっ？」

レキ「次に雪が降ったら、一面真っ白になるよ。雪の中にいるみたいにみんな真っ白。そうなるまえに冬支度しないとね」

ラッカ「うん……」

ラッカも、残雪を踏みしめて歩く。足元から目を上げると、数歩先をゆくレキの後ろ姿が目に留まる。

ラッカ「雪の中か……。繭の中で見た夢も、雪の中みたいだった」

レキ「ああ、空の夢だもんね」

振り向かず、先をゆく子供たちを眺める風のレキ。

ラッカ「うん……。あのね、私も……そこから先、何が起きたのか憶えてないの。何か大切な事、思い出せずにいる気がして」

レキ「……」

ラッカ、再び俯き

ラッカ「ときどき、何かを思い出しそうになるんだけど、怖いの、まるで……」

レキ、先をゆく子供たちに向かって大きな声で

レキ「あんまり先行くなよー！」

子供たちの笑う声。道の先から声が返ってくる。

子供（ショータ）「レキー。はーやーくー！」

苦笑するレキ。道は緩やかな下り坂。ラッカの足取りはいつの間にか重くなっていて、子供たちからずいぶん遅れてしまっている。レキもラッカに合わせて歩幅を緩めていたため、子供たちとは少し間が開いている。レキ、やはりラッカの方を振り向く事なく

レキ「……私が傍にいるよ。……私は、クラモリを失ったせいで道を踏み外しちゃったけど、私は何があっても、きっとラッカの傍にいるから」

レキ、なんとなく照れくさそうに咳払い。道の先で、子供の一人が雪に足を取られて転んでいる。ぴゃーっと泣き声。レキ、大きな声で子供たちに向かって

レキ「ああ、もう！だから危ないって言ったろ！－！」

レキ、走り出す。

レキ「道の真ん中をまっすぐ歩けー！まっすぐ」

ラッカ、ちょっと微笑んで、後を追う。

▲ここまでの変更点は、やはり短く、全体にセリフのいい過ぎている部分を抑えている感じ。あと、芝居の表面にあらわれない感情を補足している。やはり、言葉で書くのは簡単だけど、これを絵だけで伝えるのは難しい。でもこのシーンはとても良くできていた。

●古着屋

古着屋の前、店の前の路地にも、服や小物が並べられて

いる。子供たちのためにドアを開けてやるレキ。一列にそろそろと店に入っていく、突然、店内から悲鳴。

店員「くわー」

ぶつん、とコードが抜ける音。その途端に大音量の音楽が鳴り響く。

●店内

無人の店内。子供の一人がカウンターのラジオの前で呆気にとられた顔をしている。ラジオは大音量でノイズ交じりのけたたましい音楽を流している。カウンターの向こうから、ヘッドフォンをずり落ちさせた店員がぬっと現れる。どうやら椅子から転げ落ちたらしい。

店員「だ、誰だ！ボリュームひねった奴は！！」

店員、ラジオの前の子供に気付き、下唇を突きだして睨みつける。ボリュームを戻しながら

店員「あのなあ、これ勝手にひねると……」

レキ「ああ、そういう起こし方があったか」

レキとラッカ、入ってくる。店員、大げさに顔をしかめ、片耳に指を突っ込んで

店員「ひどいなあ」

レキ「いつも寝てるから」

店員「違う！あえて寝たふりしてるの。お客さんがリラックスして買い物できるように」

レキ、軽く肩をすくめて

レキ「どうだか。頼んだもの、できてる？」

ぼんぼんとテンポの良い会話。馴染みの客といった感じ。

店員、親指で背後のドアを指す。ヘッドフォンを置いて立ち上がり、子供をもうひと睨み

店員「ちぇ。こーんないたずら坊主の服だと知ってたら……」

レキ、ボリュームをいじった子供の頭をぽんと叩いて

レキ「タク、あやまんな。おじさん怒ってるって」

頬を膨らませてぶいっとそっぽを向くタク。店員、ドアを開けながら

店員「おにいさん！」

背後を振り返り、レキに向かって

店員「サイズ見てよ」

レキ、子供たちを奥の部屋に促す。ラッカ、手持ち無沙汰にしている。

ラッカ、すく消むから冬服選んでなよ」

ラッカ、頷く。子供たちとレキ、店員、ドアの向こうに消える。突然静かになった店内。ラジオが消え、無人になってみると店内は薄暗く、うら寂しくもみえる。

棚に並んだ服をぼんやり見るラッカ。突然はっとして、手帳を出す。手帳の交換証はあと一枚しかない。ラッカ、俯き、落ちこんだ顔。

ラッカ「仕事……見つけなくちゃ。でも……」

突然、ガラン、と音を立てて、若いカップルが入ってくる。男は片手に店の前に並べられていたシャツをハンガーごと持っている。

男「……あれ？」

カップル、無人のカウンターの前まで行き、奥のドアに。向かって

男「すいませーん」

店員「……あー、はいはい」

店員、ドアを開けて出てくる。男からシャツを受け取り、値札をあらためている。女、ラッカに気付き

女「わー、灰羽ちゃんだ。かわいー」

駆け寄ってくる女。ぴくっと身を引くラッカ。女、そんなラッカの様子に気付きもせずはしゃいでいる。

女「うわー、わっかついてるぅ。本物だ～。いいな、いいな」

女、ラッカの光輪を指でつついたりする。男、カウンターの前で首だけひねって

男「やめろよ、迷惑がってんじゃん」

女「えーそんなことないよねー」

ラッカに同意を求める女。どうしていいか分からず立ち竦んでしまうラッカ。

女「これ、羽袋って言うんでしょ。かわいー。ねえ、羽見せて、羽」

ラッカ、羽をぱっと翻（ひるがえ）して、女から一歩離れる。男、服の入った紙袋を持って戻ってくる。女の頭をこつんと小突き、腕を取ってドアの方にひっぱる。

男「いくよ。（ラッカに向かって）ごめんな」

出て行くカップル。ドアの向こうから女の声

女「うわー灰羽見ちゃった、ラッキー。今日絶対いい事あるよ」

男「何言ってんだか……」

怯えたような表情で、身を引いた姿勢のまま呆然としているラッカ。ラッカに気付き

店員「悪いね、騒がしい客ばっかでさ」

ラッカ、ちょこっと頭を下げる。

店員「いつだかの新人さんだよね、街には慣れた？こっちの冬、早いんでびっくりしたでしょ」

ラッカ、また曖昧にこくんと頷く。店員、ラッカの元気のなさに少し調をひそめる。

暗い表情のまま、黙々と服を選ぶラッカ。店員、肘をついて少し怪訝そうにラッカを眺めている。ラッカ、長袖のワンピースを手に取り

ラッカ「……これ」

店員「あいよ」

店員、受け取った服をラッカの前にかざして、明るい調子で

店員「靴も合わせようか」

ラッカ「え？でも……」

店員「サンダル履きじゃ寒いでしょ。もうじき雪が降るし」

ラッカ、恥ずかしそうに半歩あとずさる。季節外れでいかにも寒そうな爪先。店員、棚から少し丈のあるブーツを取り出し、ラッカの前にとん、と置く。

店員「これなんかどう？」

ラッカ「あの、でも……」

店員「……買い物、嫌い？」

ラッカ「えっ？」

店員「いや、なんかつまんなそーにしてるからさ。灰羽は幸せそうにしててくんなきゃ」

ラッカ「……どうして？」

店員、カウンターに入り、ラッカの服とブーツを包み始める。

店員「どうしてって……うーん。なんていうか、ガキの頃からお袋に、灰羽は天のカミサマに祝福を受けた者、って教わってきたからさ。いい事あるような気がするんだよね。灰羽が来ると」

ラッカ「私……祝福なんて……」

店員、笑って

店員「ああ、そんなの街の人間が勝手に思ってるだけの事。気にする事ないって。……でもまあ、古着屋だって、灰羽の役に立ってるって思ったら、わりと立派な仕事に思えんだよね」

ラッカ、何かを言いかけるが、ドアを開けて子供たちがぞろぞろ出てきたために、言い淀んでしまう。子供たちはお揃いの外套に身を包んでいる。店員、タクに向かって

店員「どーだ、あったかいだろ」

タク、にーっと笑う。店員、苦笑して

レキ「どーも。ラッカ、決まった？」

ラッカ「うう、うん」

店員「はい、これ」

店員、ラッカに紙袋をふたつ差し出す。レキ、子供たちと一緒に外へ。

ラッカ「でも、私、手帳。あと一枚しか……」

店員「ああ、じゃ、今は一枚でいいよ。新しい手帳、すぐもらえるんでしょ？」

店員、ラッカから手帳の最後の一枚を受け取り、手早くサインをする。

ラッカ「私、まだ、仕事見つけてないんです。だから……」

店員、ちょっと心配そうに

店員「ああ、そうかあ……。ま、何とかするよ。いろいろ大変だと思うけどさ、頑張りな。街の連中はみんな灰羽の味方だから」

ラッカ、店員から荷物を受け取る。俯くラッカ。

ラッカ「でも……私は、出来損ないの灰羽だから……」

店員「へ？」

●古着屋の前

子供たち「ありがとーございました」

お揃いの外套を着て一列に並んだ子供たち。一斉にお辞儀。レキとラッカも頭を下げている。窓越しに、手を振る店員。俯き、立ち去るラッカの後ろ姿を少し怪訝そうな顔で見送る。

●大通り

古着屋のある脇道から出て、メインストリートに入ったところ。比較的人出もあり、賑わっている。

レキ「さーて、暗くなる前に帰るか」

ラッカ「……私、少し散歩してから帰る」

レキ、ラッカが無理に明るく振る舞おうとしているように見えて、心配そうな表情。

レキ「どうしたの？何かあった？」

ラッカ「ううん、ちょっと考え事したくて」

レキ「……うん、分かった……じゃ」

レキ、子供たちを連れ、歩み去る。ラッカ、その後ろ姿に向けて

ラッカ「レキ」

レキ、振り返る。

ラッカ「今日は……ありがとう」

レキ、微笑み、片手を軽く上げる。去ってゆくレキを見送るラッカ。

●街路

服の袋を下げ、とぼとぼと歩くラッカ。

遠くに大門前広場が見え、その先に壁が見える。広場に続く階段にさしかかると、明らかに混雑が増す。市が立っている。

ラッカ「そうか……トーガが来たんだ……」

ラッカ、人込みの中、長テーブルの上に雑多に積み上げられた品物を眺める。缶詰めや瓶詰め、固形燃料、大量の布、蔓を編んで作った籠など、実用的なものから、得体のしれない干し肉や、船の錨、車のナンバープレートのようなものなど、変なものもある。トーガの持ち込んだものと、交換のために街の人間が持ち込んだものの余りもあって、市は活気づいている。路肩でシタールのような楽器を演奏している者、肉屋の客寄せのための檻に入れられた子豚とそれを眺める子供たち。ラッカは、トーガの持ち込んだ雑貨の山に目を寄われる。

ラッカ「あれ……クウの靴……？」

人波を掻き分け、驚く人達を押しのけるようにして雑貨の山にたどり着く。ひったくるようにして雑貨の山から靴を手に取り、眺める。みるみる落胆の表情。

ラッカ「似てるけど、違う……」

売り子の太ったおばさんが、が怪訝そうに声をかける。

売り子「買うのかい？」

ラッカ「いえ……」

売り子「あんた灰羽だろう？大丈夫だよ。ここにあるもんはトーガの持ってきたもんで新品じゃないから、灰羽にも買えるよ」

ラッカ「あの、今、手帳がなくて……」

売り子、あきれ顔で

売り子「じゃあ、何しに来たのさ。ここにはタダでやれるモンはないよ」

ラッカ「そんなつもりじゃ……あの、すいません」

靴を戻し、あたふたとその場を離れようとするラッカ。突然背後から犬の咆哮、驚いて振り返ったラッカのすぐ脇を、突進してきたドーベルマンが飛びすぎる。ラッカの手から、持っていた紙袋が弾き飛ばされ、ブーツとワンピースが路面に転がる。ドーベルマンはすばやく身を

翻し、ラッカに向かって荒々しく吠えまくる。怒み上がり、息もできないラッカ。守衛所から息を切らせて門番の老人が駆けてくる。

門番「はぁ、はぁ、一体なんだ、鉄砲玉みたいに……飛び出しよって……」

やっと追いついた門番の老人、地面に落ちた手綱（首輪から繋がっている革ひも）を拾い上げて自分の手に厳重に巻き付け、くい、とひっぱる。犬はそれでやっとおとなしくなる。犬に驚き、周囲からは売り子達を除き、人が消えている。その、何もない路面に破れた紙袋から飛び出したラッカのワンピースとサンダルが転がっている。

門番「――――いきなり飛び出したんで、泥棒でも出たのかと思ったが……」

門番、ラッカを見る。ラッカは震えていて声もでない。

売り子「ちょっと、聞き捨てならないね」

売り子のおばさんが助け船を出す。

売り子「この子はうちの客だよ。犬を嗾（けしかけ）けた上に灰羽を泥棒扱いするなんて、どういうつもりだい」

門番「嗾けたわけでは……。いや……申し訳ない」

狼狽し、服とサンダルを拾い集める門番、それをラッカに手渡そうとして、破れた紙袋に気付く。やれやれ、という顔。

●大門前広場

守衛所へ向かうラッカと門番と犬（紙袋のためにわざわざ、という感じにならない程度の距離です）。

門番「言い訳するわけではないんだが、こいつがあんなに吠えるのは、よほどの事だ。あんた、何か見なかったかね？」

一瞬迷い、首を横に振るラッカ。門番、ため息をつき、

門番「やれやれ、じじいになって、いよいよこいつも惚けたかな……」

あきれ顔で犬を見下ろす門番。

ラッカ「……おじいさん大なんですか？」

恐る恐る門番を見上げ、次いで犬を見るラッカ。ドーベルマンはだるそうな顔で少し弛んだ口元から歯をにっと覗かせる。片方の耳がよれっと倒れる。

守衛所、犬を杭に繋ぐ門番。厳つい顔とは裏腹に、いつも何かに迷うような、断言する事を避ける口調。

門番「多分な。トーガに連れられて、ここに来て、もう10年になる」

門番、守衛所にはいる。戸棚をがさがさとかき回して、袋の代わりになるものを捜している。

ラッカ「トーガに？」

門番「番犬は、街の外の犬がなるんだ。多分、街の外の悪いモンに鼻が利くのだろう」

ラッカ、門を見上げる。間近に立つと、それは空を圧するほど高い。

ラッカ「街の外には、悪いものがいるんかですか？」

門番、探し物を続けながら

門番「見た事がないから分からんよ。まあ、トーガは武器を持たずにここに来るのだし、迷信かもな。何故？」

ラッカ「……友達が、街の外へ行ってしまったので……」

門番、探し物をする手を止め

門番「……ああ、巣立ちの日か。大丈夫、街が巣立つ事を認めたのなら、多分、危険はないのだろう。この街は灰羽を傷つけないためにあるのだから」

ラッカ「だったらどうして……こんなに突然、離れ離れに……」

門番、顔を上げる。ラッカは俯き、手の甲で目をこすっている。傍らでドーベルマンが神妙な顔でラッカを見上げている。

ラッカ「分からないんです。なんで私、灰羽になっちゃったんだろう。何の取り柄もないのに、突然この街に来て、灰羽だと言われて……。でも、灰羽なんて、飛べない羽があるだけで、何もしてないのに、ある日突然消えてしまう……。それだけのものじゃないですか。灰羽は、何のためにここにいるんですか？」

門番「私は何も断言する事は出来ないが……多分、永遠なんてものはどこにもありはしないのだろう。灰羽だけではない。人も、動物も、年を取ればいつか死によって、切り離されてしまう。突然になる」

門番、薄暗い守衛所からラッカのいる陽射しの中に出てくる。犬の頭を撫で

門番「誰も、そこから逃れる事はできん」

ラッカ「……悲しくはないですか？」

門番「悲しいだろうな。だが、悲しいというのはきっと病気みたいなもので、いつかきっと癒されるはずだ。（ラッカに向き直り）灰羽なら、なおさらだ」

ラッカ「私は……駄目な灰羽だから……」

門番、静かにラッカを見下ろす。

門番「罪悪きか……。それで……」

ラッカ、ぴくっと身を震わせる。

門番「安心しなさい。誰にも言わないし、罪悪きを差別したりはしない」

ラッカ「……でも、でも、罪悪きは呪われているって。壁を越える事もできないって……」

番犬、ぬっと入り口から入ってくる。入り口のすぐ脇の壁に掛けられていた、古い革の鞄をくわえ、門番に差し出す。門番、それを受け取り、ラッカにそれを渡す。

門番「ああ、そうだな……これをあげよう。古いものだし、女の子には似合わんかもしれんが、袋の代わりくらいにはなるだろう」

ラッカ首を振り

ラッカ「……私、街の人達にたくさん親切にしてもらいました。でも、私、何もお返しできないから……」

門番、優しく微笑み

門番「たくさんの親切を受けたという事は、きっとあんたが切実に救いを求めていたという事だろう。今は、何も考えず受け取っておきなさい。救われたいと願う者は、いつか他人を救う者になる。……それだけは確かだ」

●風の丘

夕刻。緑の褪せた、黄金色の草原。低いうなりをあげ、ゆっくりと回る風車。とぼとぼと歩いているラッカ。風車のふもとに立ち、空を見上げる。威圧感のある大きな羽根は暮れなずむ空を背景に、ぼうっとした不確かな影の塊のように見える。風が、草原を波打たせながらラッカの元へ打ち寄せ、吹き抜けてゆく。

風向が定まらず、ガタン、ガタタン、と軋むような音を立てて角度を変える風車。

ひとき わ大きな風が、草原とラッカの上着をはためかせ、過ぎ去ってゆく。

不意に、カラスの鳴き声。はっとするラッカ、風車の支柱の端に、カラスが留まってこちらを見下ろしている。知性があるかのような瞳。さらに一羽のカラスが飛んできて、近くの木立に留まる。戸惑うラッカ、突然、過去に何度かあった、目の前にカラスが現れたシーンがフラッシュバックのように脳裏に甦る。門の前でトーガを見かけた時、カナとこみ捨て場にいた時、時計台のテラスから見た壁を越える鳥、クウの巣立ちを告げた、あの鳥。

ラッカ「……なに？……私を……呼んでる？」

最初のカラスが一声鳴く。それに応じるようにもう一羽が鳴く。合唱するように数度それを繰り返し、突然2羽のカラスは飛び立つ。鳴きながら、ラッカの頭上を数度旋回し、飛び去る。それを目で追うラッカ。カラスは西の森へと消える。

ラッカ「あっちは……西の森……？」

●西の森

森の入り口に立つラッカ。一瞬不安に駆られ躊躇する。薄暗い森の中を窺うようにしていると、不意に、オールドホームの鐘が鳴る。振り返るラッカ。

ラッカ、ほっとし、意を決して森に分け入ってゆく。鐘はゆっくりと5回鳴る（6回鳴った事を確認させる必要はありません）。

森の中。歩いてゆくラッカ。木漏れ日がすっと弱くなる。陽が陰り、風が梢を揺らす。ときれとぎれにしか見えない空を不安げに見上げる。

●森

森の中。不安げに辺りをきょろきょろ窺いながら進むラッカ、迷い始めている。ふと、近くの木にカラスがとまっているのを見つける。カラスはラッカが気づいたのを待っていたかのように、一声鳴いて、森の奥へと消える。

ラッカ「呼んでるんだ……私を」

薄暗い森の奥へ進むのを躊躇するラッカ、遠くで鐘の音。

ラッカ「……大丈夫。鐘の音があれば帰れる」

そう自分に言い聞かせ、森の奥へ。

●井戸

獣道のような暗く細い道を歩くラッカ。前方が少し開けていて、光が差している。

15メートル四方ほど、森が途切れていて、まるで木々が何かを恐れてあとずさったかのよう。傾きかけた陽射しが、森の中のその領域を浮かび上がらせている。中心には、大きな古い井戸がある。井戸の縁やつるべに、カラスが留まり、じっとこっちを見ている。ラッカ、恐る恐る一歩踏み出す。ふ、と吐いた息が、白く染まる。

ラッカ「空気が……違うみたい……」

ラッカが近づくと、カラス達は一定の距離をとって離れた場所に移る。だが、飛び去りはしない。

ラッカ、井戸の中をのぞき込む。かろうじて枯れた井戸の底に、なにか白いものがかすかに見える。

ラッカ「何かある……」

ラッカ、自分を渦巻きに取り囲んでいるカラス達に

ラッカ「これを見せたかったの？そのために……私を呼んだの？」

カラス達、反応はなく、ただじっとラッカを注視している。

ラッカ、井戸を覗くが、暗くて何も見えない。どうしたものか迷ううちに、井戸の端に取り付けられた、細い金属のハンゴに気づく。コの字型の楔を打ち込んだもの。恐る恐る井戸の縁に上り、鎖ぐした梯子を伝って、井戸の底に降りていく。

しんとした暗い井戸の底。何かが見える。ぼんやりとした闇の中心に、漂白したような白と、闇よりも暗い黒。

ラッカ「あれは……」

目を凝らし、身をひねるラッカ。それが黒い鳥の死骸であるとかろうじて判別がつき、もう一段降りようとした足先の梯子が、何の抵抗もなくぽきりと折れる。

ラッカ「―！」

虚を突かれ、手を滑らす。ラッカの体は暗い井戸の底へ消える。

●夢の再生

暗闇。今よりも少しだけ幼い、ラッカの嗚き声。

ラッカ（モノローグ）『――――』わたしなんて……いなくなっちゃえばいいんだ――――』

暗く重い、灰色の空を、ラッカは音もなく落ちてゆく。強い風に揺さぶられ、目を覚ますラッカ。クウのくれた上着を着て、靴を履げ、光輪と羽も、泥で汚れている。風圧に逆らい、なんとか目を開けるラッカ。目を開けてしまうと、風は強いが苦しくはない。風に服はなびいているが、目を閉ぐことはできる。ラッカ、辺りを見回し

ラッカ「いつか……どこかで見た……。夢？……でも……寒い……」

無意識に風を避けようとかざした手が泥で汚れている。

ラッカ、はっとして、緩く握っていた手を開く。泥に混じって、黒い鳥の羽がこびりついている。眼を見開くラッカ。第1話冒頭の、空を落ちるラッカと鳥とのやり取りが、記憶の中に断片的に蘇る。

ラッカ「思い出した……。あの時……。黒い鳥が傍にいて、私を助けようとしてくれた――――」

1話冒頭の、ラッカの袖をつかみ、必死にラッカを引きとどめようとするカラスの姿が蘇る。重みに耐えきれず、脚を離してしまうカラス。見る間にラッカとの距離が離れてゆく。

はっと我に返るラッカ。手のひらの黒い羽が手から剥がれ、空に舞う。ラッカ、虚空に手を差し伸べ、何かを叫ぶが、それは声にならない。雲が途切れ、視界が開ける。だが、見えてきたのは地上ではなく、地平を覆うほど巨大な井戸。ぱっくりと口を開けたその闇の中に、ラッカは吸い込まれるように落ちてゆく。

ラッカ（モノローグ）『あなたは、誰？……どうして私を――――！』

暗転。

●井戸の底

ぽた……ぽた……と、どこかで水音がしている。

暗闇の中に、光輪がぼうっと浮かんでいる。

ラッカ「……う……」

光輪がかすかに震える。闇に眼が慣れるように、次第に情景が見えてくる。井戸の底にうつ伏せに横たわるラッカ。折れた梯子の断片がいくつか散らばっている。力なく投げ出された腕がぴくりと動く。肘をつき、身を起こそうとするラッカ。頬や髪が泥で汚れている。ぼんやりと霞む目で手を見ると、その手は無意識のうちに土を掻き、湿った泥の塊を握りしめている。ゆっくりと手を開く。

――――手のひらには黒い鳥の羽が握り込まれていた。

ラッカ「あ……」

眼を見開くラッカ。眼の焦点があう。汚れた手のひらの向こうに、羽を開いた状態で半ば白骨化している鳥の死骸が横たわっている。羽毛は散っているが、風切羽根は、礎にされたかのように開かれた両の尺骨に、原形をとどめる程度には残っている。羽先の付近の土が、ラッカの手の形に浅く抉られている。枯れ葉と枯れ枝の中、風雨に洗われた白い頭蓋が闇の中にぼうっと浮き上がって見える。瞳のない眼窩、その二つの闇が、じっと静かにこちらを見つめている。遠くで、ごぉおん、ごぉおん、と、鐘の音が聞こえる。

原稿用紙200字詰め22枚

▲第1稿。決定稿との差は、何といっても、門番との対話。今読み返してみても、実際にあった事のように場面が頭に浮かぶ。切らざるを得なかったのは返す返す残念。自分にもう少し構成力があったら……と思うが、当時はこれが精いっぱいだった。

門番の人物像は、あまり決まっていなかったが、この場面でずっと決まった。断言を避け、迷いながら正直に言葉を探そうとする前半部の対話があり、最後に「救われたいと願う者はいつか他人を救う者になる……それだけは確かだ」とはっきりと言いゐる。この言葉は、物語全体のテーマの象徴となるもので、この場面を書いた時は、門番はもう少し大切な役割を持って再登場すると思っていた。声優さんも、ある程度選定に入っていたのではなかったかと思う。惜しかった。犬も、立てていた片方の耳がよれっと倒れる、などと細かく描写していて、愛着があった。

門番と犬は、決定稿までシーンとしては書いていたが、コンテの際に、助監督の大森さんから

「全体のテンポや流れに尺を使いたいのでここは詰めたい」

という提案があり、最終的に削られる事になった。確かに、今決定稿を読み返すと、大門前のシーンは、ここまでコンパクトにするなら、ばっさり切ってしまった方が得策だと思う。

シーンに愛着があって、冷静に判断できていなかった。

他には、古着屋の描写なども、ずいぶん変わっている。書いていて楽しくて、ついついい長くなってしまったが、やはり要点を簡潔にまとめる必要があり、決定稿の形になった。

2稿から4稿までは、それほど大きな違いはなく、部分部分、少しずつ5稿に近づいていっている。

8話を書いている時は、門番がくれた靴が重要な伏線で、森に迷い込んだラッカが、ステージでクウの光を失った光輪を靴に入れて……というような展開を考えていたこともあった。残念ながら、光輪を靴に入れてどうしようとしたのか、その後どうなるのかはあいまいにしか覚えていない。どうするつもりだったんだろう。

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第09話　井戸・再生・謎掛け

第4稿（2002.08.22）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ

トーガ（セリフなし）
話師

●サブタイトル

●風の丘

遠景。月も星も見えない闇の中、重く雲の垂れ込めた夜空から舞い落ちる雪。時折吹く強い風に、雪片が、まるで魚の群れのように一斉に向きを変え、流されてゆく。吹雪くほどの雪ではないため、まだ地面に雪は積もっていない。懐中電灯を手にしたネムとヒカリ。ゴトン、ゴトン、とせわしなく回転する風車。風車の羽根が風を切る甲高い音が風に混じる。

ヒカリ「ラッカー！……ラッ……きゃっ」

突然の強風が、ざあっと足元の草を逆立てる。見えない何かが草原を駈け抜けていくかのように、風は草を薙ぎ、吹き抜けてゆく。不安げな表情で風の過ぎた先を目で追うヒカリ。

カナ「おーい！」

懐中電灯の光が草を照らして近づいてくる。ヒカリ達と逆方向から歩いてきたレキとカナ。ヒカリ達と合流する

レキ「いた？」

ネム、首を振る。ヒカリ、空を見上げて

ヒカリ「雪……ひどくならないといいけど」

レキ「大丈夫、これは積もる雪じゃない。（自分に言い聞かせるように）きっとすぐ止むよ……」

レキもぼんやりと空を見上げる。風は強まったり弱まったりしながら吹き続けている。

●井戸の底

前シーンから続いている地上の風の音が、井戸の壁に不安気に反響している。風のせいで、雪はそれほど強く吹き込んではいないが、風もなく、温度も低いぶん、雪は融けずに井戸の底に浅く積もっている。

1

▲ここもまた、細かく情景描写をしているが、風に舞う雪片まできちんと再現してもらえた。

井戸の隅に、壁に体を寄せるようにして、膝を抱えて座っているラッカ。羽袋はつけている。光輪の光で、井戸の底は僅かに周囲より明るい。ラッカは上着のフードをかぶり、小さく体を丸めている。そのフードや肩、羽袋の上にも少し雪が積もっている。フードの奥のラッカは、目を閉じ、憔悴していて、意識を失っているようにも見える。肩に積もっていた雪が、かさっと音を立てて滑り落ちる。微かに瞼が震え、ラッカはゆっくりと目を開く。ぼんやりと霞むラッカの視界。舞い降りてくる雪。その向こうに、鳥の墓。

ラッカ「……あなたは……誰？」
クウ（3話回想セリフ）『カラスと話ができたらいいのにね』
カナ（4話回想セリフ）『鳥はさ、忘れ物を運ぶんだって』
スミカ（5話回想セリフ）『ね、生まれてくる時って、どんなだった』
ラッカ（5話回想セリフ）『……夢の中で、誰かが守ってくれてた気がして……』
スミカ（5話回想セリフ）『いいこと聞いちゃった』
ラッカ（5話回想セリフ）『え？』
スミカ（5話回想セリフ）『親の気構えってやつをね』
ラッカ、膝にうずめていた顔を上げる。鳥の墓を見下ろす。
ラッカ「私を守ってくれた誰か……」
恐る恐る、声をかけるラッカ。
ラッカ「……おとうさん……おかあさん……？」
答える者はない。ラッカ、再び膝に額を押し当てる。
ラッカ「分からないよ……」
ふと、頭上の壁にかすかな明かりが差す。緩慢な動作で苦しげに顔を上げるラッカ。井戸の端に、ランプを掲げた人影。ラッカ、はっとして眼を見開く。壁に寄り掛かるようにして身を起こし、怯えながらも、声を掛ける。
ラッカ「……誰！……あの、どなたですか？」
返事はない。人影はじっとのぞき込んでいるが、声は出さない。シルエットだけで、顔はまったく分からない。

▲ここでオープニングを挟んでくるとは思わなかった。たしかに、この一連のモノローグは、文字数はそれほどないけど、間を多めにとらなくてはいけないので、全部繋げるとかなりの長さになり、だれてしまったかもしれない。

▲シナリオでは、得体のしれない人影が現れ、ラッカは助けなのか害意のあるものなのか分からず怯え、人影が井戸に降りてきて、やっとトーガだと判る、という流れにしていたが、作中では、最初からトーガだと判るように描かれている。
ランプを掲げているので、人影がシルエットのままなのは不自然だったかもしれないが、最初のカットは正体不明の人影の方が、その後のラッカのセリフとの噛みあい方を考えるとよかったかもしれない。

ラッカ「梯子が折れて登れないんです。私は街外れのオールドホームに住んでいる灰羽のラッカといいます。……街の方ですか?」

人影は身じろぎすらしない。不安になるラッカ。不意に光が遠ざかる。ぽっかりと開いた丸い井戸の口から人影は消えている。焦るラッカ。

ラッカ「待って!登れないんです!助けて!」

ラッカ、足を引き摺り、反対側の壁(人影の去った方角)まで歩き、壁に手をついて井戸の口を見上げる。石積みの壁に手をかけ、登ろうとする。

ラッカ「う……う」

ラッカ、一段登りかけるが、がりっと音を立てて滑り落ちる。

ラッカ「あっ……!」

手を押さえ、身を折るラッカ。体の均衡を失い、よろめいて肩から壁に倒れ込み、そのままずるずると壁にもたれる。手を見ると、爪が割れて血が滲んでいる。もう一度頭上を見上げるが、人影はなく、風の音だけが冷たく響いている。

ラッカ「助けて!!」

渾身の力で叫ぶラッカ。だがその声は石壁に吸い取られるようにかき消えてしまう。肩で息をするラッカ。白い息が上がる。突然、何の前触れもなく、ぬっと人影が現れ、井戸をのぞき込む。とっさに上げそうになった悲鳴を呑み込み、怯えた目で遥か頭上の人影を見上げる。ゆっくりと明かりが近づいてきて、もうひとり、人影が現れる。手にランプを持っていて、こちらが最初の人影と思われる。二つの人影は、ちょっと顔を見合わせ、手ぶらの方の人影が、両手を胸の辺りで組み合わせ、隣の人影に何か合図をしている。いつか話師とトーガの間で交わされていた手話だと分かる。ランプの人影、頷き、ランプをつるべの桶に入れ、するすると井戸の中に降ろす。恐る恐るランプを受け取り、掲げるラッカ。人影が一人、梯子を降りてくる。崩れたところから、悠然と飛び降りる。しゃん、と鳴子の音がする。

▲痛そう。本編でははっきりとした描写はない。基本的に、爪は省略して描かれるので、こういうときだけ爪をリアルに描くとおかしいかもしれない。

▲全体に、シナリオが長すぎてしまったせいで、井戸から出るまでのトーガとのやりとりは簡潔にまとめられている。でも、ラッカが梯子を上がる時、一度鳥の墓を振り返るなど、僕がフォローし忘れた部分はきちんと補足されている。

すっと姿勢を正してラッカの前に立ったのは、長身のトーガ。片手でフードを目深に引き下げる。初めて間近で見るトーガは、表情が読めないためにどこか得体のしれない印象がある。トーガ、指で何かの文字を作り、ラッカを見る。意味が分からない、と首を振るラッカ。トーガはラッカに背を向け、片ひざをつく。戸惑うラッカ。トーガ、自分の肩を指さし、次いで頭上を指す。ラッカ、やっと意味を察し、ランプを置き、トーガの肩に乗る（そのまま乗ろうとして、慌てて靴を脱ぐ）。足場に手が届く。痛む足を気にしながら、なんとかハシゴを登る。井戸の端にはもうひとりのトーガが立っている。トーガはラッカを助けるでもなく、ほうほうの体で井戸の縁に這い上がるラッカを黙って見ている。その姿はやはり、感情が読めず、得体がしれない。ラッカ、浅く雪の積もった地面に降りる。裸足が痛々しく見える。雪は既に止んでいる。

ラッカ「あ、あの……」

ラッカ、トーガに話しかけようとするが、トーガはそれを無視し、つるべを引き上げる。桶にはランプが入っているらしく、ゆらゆらと光が漏れている。井戸の中からしゃり、しゃり、と鳴子の音をさせながらトーガが上がってくる。やはり、ラッカを無視してランプを手にし、そのまま背を向けて立ち去ろうとする。

ラッカ「あ、ありがとうございました。助かりました」

と、深く頭を下げるラッカ。

トーガ、ちらりとラッカを振り返り、だが足を止めない。

ラッカ、疲労と安堵から脱力して立ち尽くしているが、突然はっとし

ラッカ「待って！」

トーガ、ラッカの声の切迫したニュアンスに思わず立ち止まる。

ラッカ「……クウという灰羽の女の子が、壁を越えたんです。背はこのくらいで（身振りで示す）、私の友達なんです。ご存知ありませんか？」

4

▲ランプを回収するならついでにラッカの靴も入れてくれればいいのに、と思うが、あくまでも最小限しか干渉しようとしないトーガたち。

僅かだがラッカの言葉に反応するトーガ。一瞬顔を見合わせ、だが、ラッカの方を振り返らず、いっそう顔を伏せ足を速める。片足を引きずり、痛みに顔をしかめながら追うラッカ。

ラッカ「ごめんなさい。話しちゃいけないのは分かってるんです。だけど、クウは友達なの。私たちは壁の向こうの事、何も知らないから、心配なんです。クウは無事ですか?」

トーガたち、小走りに。裸足で追うラッカ。森に入ると雪は無くなるが、道はぬかるんでいて、不安定な姿勢で走るラッカは、一歩進むごとに泥を跳ね、服を汚してゆく。息を切らし、やがてぽろぽろ泣き出す。それでも諦めず、よろめきながらトーガを追う。

ラッカ「話せないなら、せめて……せめてクウを見たならうなずいて下さい。それくらいいいでしょう!!」

トーガは既にかなり先を走っており、その姿は森の暗がりに消えてゆく。ラッカ、泣きながら追おうとするが、足がもつれて転んでしまう。起き上がると、トーガ達の姿は既になく、風の音だけが幽(かす)かに響く真っ暗な森に、ひとり取り残されてしまっている。ふらふらと立ち上がり、泥だらけの手で涙を拭いながら、迷子の子供のように歩き続けるラッカ。既にトーガの去った先がどちらなのか分からなくなっている。目の高さの梢を手で払うようにして進み出た先は、異様な程威圧感を持った闇。それは空間ではなく、視界全てを覆う苔生(こけむ)した石壁。驚き、反射的に身を引くラッカ。不安げに周囲を見渡すが、人の気配はない。遠くからでは分からなかったが、壁の基部は、荒く削った大きな不定形の岩を積んで造った土台のような起伏が定期的にあり、壁沿いに歩く事は不可能に近い。土台自体も苔生し、木の根が絡み、自然物との境界が曖昧になっている。いずれにせよ、トーガは壁沿いに走り去ったとは考えられず、ずいぶん前に方角を間違えていたのだと思い、ラッカは途方に暮れて立ち尽くしてしまう。

周囲は風も止み、大気の震えを壁が吸収してしまってい

▲ラッカがこのシーンで裸足で歩いているのは、そういう皮膚感覚のようなものをきっかけにして、キャラクターに感情移入して欲しかったため。
たとえば裸足で歩いている足のアップがあれば、裸足で道を歩いた経験がある人なら、観ながら自分の記憶を呼び起こして、それがどんな感覚だったのかを思い出し、画面上のキャラクターにその感覚を重ねて、映像からくみ取れない情報を補おうとする。そういう気持ちが感情移入の起点となるのではないかと思う。

▲これまた言葉では簡単だが描くとなると難しい情景と内面描写。

るかのような深い静寂があたりを包んでいる。さわ、と葉擦れのような、子供の囁きのような音。ラッカ、不安げに音のした先を探る。さわ、さわ、と再び音がする。耳を澄ますと、それはラッカの背より遥かに高い壁の中から響いてくるように感じられる。壁を見上げるラッカ。たくさんの人達が一斉に囁きを交わしているようなその音は、深く複雑なエコーを伴いながらラッカの方に近づいてくる。まるで、祭りの夜に山車を引く子供達のように、無数の声達が囁き合いながら壁の中を行進してゆく。その騒めきがラッカの眼前の壁を過ぎる瞬間、反響の中にラッカはクウの声を聞いた。

クウ『――――――（言葉として聞き取れないような幽かな笑い声のような囁き）』

ラッカ「……クウ！？」

弾かれたように身じろぎするラッカ。足を引き摺りながら壁に駆け寄る。壁に耳を寄せようとして、無意識のうちに壁に触れてしまう。

ラッカ「！……冷たい……」

驚き、反射的に手を引くラッカ。呆然とした表情で、壁と手を交互に見る。指先が震えている。不意に、どこかでガサッという葉擦れの音。鋭い声。

声「何をしている！！」

驚くラッカ。振り返ると少し離れた壁の傍に、灰羽連盟の話師が杖を手に立っている。ずっと奥の茂みを越えてやって来たようにも、壁の基部の石積みの起伏の影から突然現れたようにも見える。話師、足早にラッカの方に歩いてくる。

話師「壁に触れてはならない。この森に入るなと言われなかったか？」

話師、ラッカと壁の間に立って杖をかざし、足元の地面をとん、と杖で突く。気圧されるように壁から離れるラッカ。足を引き摺り、たたらを踏む。

話師「足を挫いているのか？……これを使いなさい」

と、杖を差し出す。

話師「オールドホームの灰羽だな？名前は……ラッカ」

■壁と森。壁の近くの樹は、幹がうねるように曲がったものがある、という設定。冷静に考えるとちょっと怖いかも。

ラッカ「……はい」
　ラッカ、杖をついて、挫いた足を浮かす。痛そう。
話師「事情は後で聞く。歩けないならここに居なさい。人を呼んでこよう」
　ラッカを手で制し、立ち去ろうとする話師。心細さから、慌てて話師の後を追おうとするラッカ。
ラッカ「平気……です」
　痛みに顔をしかめ、杖を支えに、危なっかしく歩き出す。

●西の森

　森をゆく話師とラッカ。杖をつき、おぼつかない足取りで、話師に遅れないよう必死についてゆくラッカ。
話師「……井戸から助けられた事はやむを得んが、トーガとは接触してはならない。それは話師の資格を持つ者にしか許されていない」
ラッカ「クウが……友達が、壁を越えたんです。それでトーガなら、何か知ってるんじゃないかと思って……（ぱっと話師の方を振り仰ぎ）そうだ！クウの声を聞いたんです。壁の中から……」
話師「それはお前の心が生んだ幻だ。巣立った仲間を思うお前の気持ちを、壁が鏡のようにお前に見せたに過ぎない」
淡々と切り返す話師。ラッカ、期待していた表情が落胆に変わる。
　話師、淡々とした調子で言葉を続ける。
話師「壁を越えた者は壁の外で暮らす準備が整ったと壁に認められた者だ。だから心配はいらない」
　ラッカ、話師から目を逸らす。羽袋の中の黒い羽を強く意識する。
話師「それよりも、何故井戸を調べようと？」
ラッカ「……井戸の底で、鳥が死んでいるのを見つけたんです」
話師「それが危険を冒して井戸に降りた理由なのか？」
ラッカ「……私、この街に来てからずっと、鳥が、私の事を呼んでいたような気がしてたんです。（悲しげに）……うまく言えないけど、あの鳥は、私のせいで死んでしまったような

▲これは本当の事なのか、こういう問いに対して、はぐらかすためにあらかじめ用意された答えなのか判然としない。というか、まあ僕が判然としないように書いているわけですが。

気がして……」

話師「鳥は自由に壁を越える事を許されている唯一の生き物だ。故に鳥は忘れてしまったものを運んで来ると言われる。……鳥の骸を見たとき、お前は畏れを感じたか？」

ラッカ「……いいえ」

話師「ならば、その骸は、お前が知るべき事を知った事の証だ。鳥は使命を果たした事を誇りに思ってお前に骸を見せたのだ。悲しむ事はない」

ラッカ、考え込み、いつの間にか立ち止まってしまう。話師、ラッカを置いて数歩歩く。背後で、からん、という音。話師、振り返る。ラッカの足元に杖が転がっている。ラッカ、顔を伏せ、両手で顔を覆い、泣いている。肩が小刻みに震える。

ラッカ「（泣きじゃくりながら）でも……鳥が私に伝えてくれたくれたのは、私が繭の中で見た夢の、本当の意味なんです。（感情を昂ぶらせ）……井戸の底で、夢を見ました。あの鳥は……私が知っていた誰かなんです。私の事、心配してくれてた。なのに私、それを分かろうともしないで……」

話師「思い出せない誰かの事を、何故それほどまでに悲しむ」

ラッカ、手で顔を覆ったまま、いやいやをするように首を振る。悲しみに呑まれ、混乱している。

ラッカ「分からない。でも、私、誰かを傷つけてしまった……」

話師、ラッカの方に歩み寄り、身を屈め杖を拾う。ラッカ、顔を上げる。両手の泥が顔につき、涙の後が筋になっている。話師、杖を持った手で傍らの切り株を指し示し（杖を指示棒のようにするのではなく）

話師「座りなさい。そして落ち着いてゆっくりと話なさい。それはとても大切な事だから」

ラッカ、挫いた足を庇いながら、膝丈ほどの切り株の端に、おずおずと腰を下ろす。傍らに立つ話師。

ラッカ「……（いくぶん落ち着いた口調で）……ここじゃない、どこか知らない場所で、私はずっと、自分は独りぼっちなんだと思い込んでました。自分がいなくなっても誰も気にもしてくれないって……。だから私、消えてしま

8

いたいと思ったんです。そうしたら、空の上にいる夢を見て……。でも、思い出したんです。夢の中に、鳥がいました。私を心配してくれた誰かが、鳥の姿になって、私を呼び戻そうとしてくれた。私は独りぼっちじゃなかった。なのに私……」

話師「そんな風に考える事はない。お前の羽と光輪は、この世界で償うべき罪が無いことの証だ」

ラッカ「でも、私は……。私の羽は……」

話師、言葉を止め、じっとラッカを見下ろす。低い声で

話師「罪憑きか……。薬で羽を染めて罪の気を霞ませているな。その方法を誰に聞いた?」

ラッカ「……」

口ごもるラッカ。話師、何かを理解したように、呟く。

話師「そうか……」

顔を上げるラッカ。哀願するように

ラッカ「罪憑って、何なんですか?私は罪人なんですか?私が見た夢は……本当の事なんですか?」

話師「それを確かめる術は無い。繭の夢の中で失ったものは取り戻せない。誰かを傷つけたとしても、その者と再び見（まみ）える事はない」

ラッカ「……私、どうすれば……?」

俯くラッカ。ぽつりぽつりと、たどたどしく言葉を選びながら話す。

ラッカ「私が罪人で、本当はここに居ちゃいけないのなら、どこか、私のいるべき場所へ連れていって下さい。ここは……この街は、私には幸せすぎます。みんな優しくて、誰からも大事にされて……。いたたまれないんです。もし私の見た夢が本当の事なら、私、帰りたい……。帰って、謝らなきゃ……」

ラッカ、また泣き出しそうになる。話師、ラッカの頭をなでる。大きな、皺だらけの手。話師を見上げるラッカ。ラッカは、ただ謎めいていて不気味だった話師を、今は恐ろしいと感じていない事に気づく。遠くで見ていた時より、ずっと年老いて、疲れている。話師、ラッカの顔

▲作中では、ちょっとラッカの頭をつかんで上を向かせているような感じになってしまった。ちょっとしたニュアンスの差なんだけど……。

を覗き込むようにして

話師「罪を知る者に罪は無い」

ラッカ「えっ？」

話師「これは罪の輪という謎掛けだ。考えてみなさい。『罪を知る者に罪は無い。では汝に問う。汝は罪人なりや？』」

ラッカ、呆然と考え込む。

ラッカ「私は……繭の夢が、もし本当の事なら、やはり罪人なのだと思います」

話師「では、お前は罪を知る者か？」

ラッカ「だとしたら……私の罪は消えるのですか？」

話師「そう思うなら、もう一度問おう。『罪を知る者に罪は無い。では汝は罪人なりや？』」

ラッカ「……ああ（呟くように）……罪が無いと思ったら、今度は罪人になってしまう……」

話師「……おそらく、それが罪に憑かれるという事なのだろう。罪の在処（ありか）を求めて同じ輪の中を回り続け、いつか出口を見失う」

ラッカ「……どう答えればいいんですか？」

話師「考えなさい。答えは自分で見つけなければならない」

●西の森、入り口

森を抜ける。オールドホームよりもずっと南。すぐ右手には川があり、沼へと続いている。壊れかけた木の橋があり、その先には廃道が北東へ延びている。

話師「私がついてやれるのはここまでだ。杖を貸すから気をつけて帰りなさい」

杖をつき、数歩歩き出すラッカ。立ち止まり、話師を振り返る。

ラッカ「また、会ってくれますか？」

話師「……杖を返してもらわなければならんからな」

話師、振り返り、森へと歩き出す。

ラッカ「……あ、ありがとうございます」

と頭を下げるラッカ。顔を上げた時には、話師の姿はも

▲最初は、もう少し長く、『罪憑きの少女と白いトカゲの物語』という物語をつかって説明していた。ここがすっと理解されないと、ラストに向けて、観る側を置いてきぼりにしてしまう気がして、とにかく分かりやすく、と思って試行錯誤した。

何度も改稿したが、長くなればなるほど頭に入らなくなるので、結局一番短いバージョンに落ち着いた。

▲速い！

うない。まるで幻だったかのように、周囲は静寂に包まれている。ぽつんと立ち尽くすラッカ。

●沼からオールドホームへと続く道（南の廃道）

森を振り返っていたラッカの背後からスクーターの音が近づいてくる。振り向くと、オールドホームから、廃道をスクーターのヘッドライトが南下してくる。

ラッカ「……レキ？」

慌てて橋を渡るラッカ。

レキ「ラッカ！！」

スクーターから飛び降り、レキが駆けてくる。背後でスクーターが倒れる。ラッカが橋を渡るより速く、レキは橋を越え、ラッカの元に辿り着く。何度もラッカの名を呼びながら、ラッカにしがみつくレキ。震えている。

レキ「ラッカ、ラッカ……。良かった……」

ラッカ「……ごめん。……いたた、レキ、痛い」

レキ、ラッカから身を離す。改めてラッカを見ると、夜目にも分かるほどラッカは泥にまみれ、細かい傷を負っている。

レキ「泥だらけじゃない。どうしたの？靴は？」

ラッカ「西の森で、井戸に落ちた……」

驚き、何か言おうとするレキ。それを遮るように風の丘の南端の方からカナの声。悪路に揺られながら、カナが自転車で駆けてくる。

カナ「ひとりで……（荒い呼吸）すっ飛んでくなよ！」

ネム「見つかったのー？」

ヒカリとネムの二人乗りの自転車も、廃道をふらつきながら走ってくる。スクーターのレキより大きく遅れて、やっと辿り着いたところ。はっとして、慌てて涙をぬぐうレキ。

レキ「い……いたよ」

橋を渡って、廃道側に戻ろうと、ラッカの手を引こうとするレキ。話師の杖に気付く。

▲なんか、行ってはいけない場所に行って怪我をした子供と心配性の母親みたいになっている、と、今読み返して思った。ここでは、前のシーンまでの、周囲を心配させないように、努めて冷静でいよう、楽観的でいようとしていたレキから、心の振幅が反対に振れて、ラッカの前で生の感情を見せてしまう素のレキが一瞬表れている。

▲作中では、ラッカが元気に杖を振っているカットが入っていた。壁の影響でラッカが少し酩酊しているような感じを出す事と、レキが杖やラッカの爪の怪我に気付くきっかけの意味だと思うのだけど、ちょっと行きすぎだったかもしれない。

レキ「これ……」
ラッカ「うん。話師のおじいさんが貸してくれたの。怖そうに見えたけど、いい人だね。いろんな話をしてくれた」
レキ「本当にいい人なら怪我をしてる女の子をほっぽり出したりしないよ。（ラッカの手を見て）ひどい。爪が割れてるじゃない」
　レキ、傷をあらためようとするが、ラッカの手に触れた瞬間、反射的に手を引いてしまう。驚くレキ。恐る恐るもう一度ラッカの手を自分の手で包む。
レキ「……氷みたいに冷たい。何があったの？これ、普通じゃない！」
ラッカ「変だな……全然感覚がない……」
　ラッカ、眠そうに呟く。ぐったりして立っているのがやっとという感じ。細かい汗の粒が額に浮いている。レキ、膝をついてラッカの肩を掴み
レキ「もしかして、壁に触った？」
　虚ろに頷くラッカ。レキ、顔色を変え、ラッカの手を強く引いて、廃道の方に急き立てる。走ってくるカナ達。ラッカとレキの様子がおかしいのに気付き、歩を緩める。レキ、早口に言う。
レキ「私、ラッカを連れて先に帰る」
カナ「なんだよ。血相かえて」
レキ「ラッカが壁に触った」
　ヒカリとネム、二人がかりでレキのスクーターをやっと起こしたところ。駆けてきたレキの勢いに驚いて、スクーターから飛び退く。レキ、ラッカを無理やりスクーターに乗せ、走り出してしまう。呆気にとられる3人。
ヒカリ「なに？どうしたの？」
ネム「……カナ、ヒカリ、急ぎましょう」
　カナとヒカリ、ネムを見る。ネムの真剣な表情に、事態が自分たちが考えていたより切迫している事を悟る。

●オールドホーム前

12

▲ラッカは、ここの辺りから、壁の影響が出ている。子供の頃、脊血や、熱中症を起こしかけた時の事を思い出しながら書いた。

▲『ラッカが壁に触った』というセリフに対して、作中ではカナが驚くリアクションが入っている。レキがラッカを心配するあまり、他者に対する気遣いがなくなっている事に対して、ヒカリが戸惑っている描写が足されている。

レキのスクーターがスピードを落として門をくぐってゆく。ふらふらと危なっかしい走り。

レキ「ラッカ、ちゃんと掴まって！」

ラッカ「手が……いうこと……きかない……」

アーチの中にスクーターを止める。慌ただしく降りるレキ。酔ったようにおぼつかない足取りのラッカ。

レキ「具合は？」

ラッカ「（生あくび）眠い……ふらふらする。（寝ぼけたような笑い）……あれ、足、もう痛くないや」

レキ「痛くないんじゃない！マヒしてるんだ。歩ける？」

●ゲストルーム

ふらふらとベッドにうつ伏せに倒れ込むラッカ。

ラッカ「体がどんどん軽くなるみたい……」

レキ「しゃべらなくていい。眠りな」

ラッカ「目を……閉じるのが怖いの。眠ったら……このまま消えてなくなっちゃいそうで……」

レキ、慌ただしく水を張った洗面器と布を用意している。

レキ「……壁は危険なんだ。特に西の森や沼の辺りの壁は。……危ないってあれほどいったのに……」

ラッカ「ごめん……なさい……。鳥が……呼んだの」

レキ、救急箱の中身を改めていた手を止める。

レキ「鳥が？」

ラッカ、うわ言のように

ラッカ「……井戸の底で……私、思い出せなかった繭の夢を……見つけたよ……」

レキ「井戸？……ラッカ？」

ふ、と意識を失うラッカ。レキ、泥だらけのラッカの上着を脱がせる。灰色の羽。黒く変色していたはずの羽も、正常な状態に戻っている。眼を見開き、羽を手で掻くようにして黒い羽を捜すレキ。

レキ「消えてる……。薬のせいじゃない。なんで……？」

レキの表情は喜びというより、驚愕と悲痛さの入り交じっ

▲このシーン、前のシーンとかぶる部分が多かったため、前のシーンに繰り込まれてここは短くカットされている。

▲このあたりのセリフは、少し朦朧としてハイになっているようなニュアンスだったのだけど、作中ではやや深刻になっている。

たものに見える。ドアの開く音。レキ、悪事を見咎められたかのように反射的にラッカの羽から手を放し、手を後ろで組む。カナ達、入ってくる。

ヒカリ「ラッカ、平気？」

ラッカの枕元に集まってくる一同。心配そうにラッカの顔をのぞき込む。

ネム「眠ったの？」

レキ、頷く。救急箱を検め、フタを閉める。迷い、無意識に親指の爪を噛んでいる。カナに向かって

レキ「カナ、悪いけど、街に戻って解熱剤を買ってきて」

カナ「えー。戻る前に言ってよ」

レキ「私のスクーター使っていいから」

カナ「ああ……うん。でも店、開いてるかな？」

レキ「無理でも開けさせて。壁の事、話したらダメだよ」

カナ「分かってるよ。キーは？（手を差し出す）」

レキ「ああ……（ポケットを探り、手を止め）刺しっ放し」

カナ、やれやれと言った顔で走り出す。ヒカリ、そんな二人の会話を聞きながら、ラッカの額に手を当てている。首を傾げ

ヒカリ「レキ、熱はないみたいだよ。むしろ冷えきってる……」

レキ「多分夜中過ぎには熱を出す」

レキの言葉にも、表情にも余裕が失われている。ヒカリはレキのそんな態度に違和感を覚える。ヒカリにしてみれば、皆で介抱しようとしているのに、レキ一人が状況を把握し、それを周りに伝えず、一人で抱え込む姿は冷たくつっけんどんに見える。ヒカリ、レキを心配しつつ、少し咎めるように

ヒカリ「レキ……どうして分かるの？」

ネム、ヒカリの肩をそっと押さえ

ネム「ヒカリ……。（レキに向き直り）レキ、寮母のおばあさんに見つかったって知らせた？」

レキ「ああ、まだ……」

ネム「ヒカリ、行こう。ついでに子供達の見回りしないと」

レキ「ありがと。お願い」

▲ここは、レキがラッカの羽をすくようにして黒い羽根がなくなっている事に気づいてからセリフが入るはずだが、順序が逆になり、ラッカの羽を調べる仕草が、レキが部屋に入ってきたヒカリたちに驚く芝居への前振りになっている。

コンテの段階では、それほど気にならなかった。羽を調べるレキの仕草が少しオーバーだったからか。

▲スクーターのカギに関するやりとりは、レキの狼狽ぶりを表すため。ネムはそういうレキを理解した上で周囲に気を配っている。

▲このあたりも、キャラクターの仕草が微妙につっけんどんで、細かい心情が伝わっていない気がする。絵が悪いわけではないので、真っ正面とか真横の構図が多い事が原因かもしれない。ちょっと惜しい。

ネム「寝かしつけるのなら任せて」
レキ「あんたが先に寝ないでよ」
　ネムの気遣いに気付き、レキ、少し余裕を取り戻す。かすかに笑って見せると、ネムも軽く頷き、ヒカリと連れだって出てゆく。

●ゲストルーム。やや時間経過

　急に静かになるゲストルーム。ベッドサイドに杖が立て掛けられている。水の張られた洗面器。レキはベッド脇に椅子を置いてそこに座り、濡らしたタオルでラッカの手の泥を拭っている。割れた爪から滲んだ血が、指先で固まっている。ピンセットで消毒液を浸したガーゼをつまみ、指先の血と泥を落としてゆくレキ。
ラッカ「う……」
　ラッカ、うっすらと目を開く。瞼が震えている。
レキ「ごめん、痛む？」
　ラッカ、か細い声で
ラッカ「ううん。体が……なくなっちゃったみたいで……」
レキ「見てる方が痛くなりそうなのに」
　レキ、ラッカを安心させようと、精一杯明るい口調で話しかける。だが、心のどこかで罪憑きでなくなったラッカに対する羨望の気持ちと劣等感を追い払う事ができない。ラッカ、そんなレキには気付かず、半覚醒の瞳でぼんやりと天井を見ながら
ラッカ「……なんか、羽が生えた夜みたい」
レキ「ああ、そういやそうだね」
ラッカ「いつも……レキが看病してくれる……」
レキ「おせっかいなんだ。昔っからそう」
　ラッカ、傷ついた手で、おずおずとレキの手を握る。レキ、ラッカの傷に触れないように気をつけながら、もう片方の手でラッカの手を包む。
ラッカ「レキの手、熱い」
レキ「あんたの手が冷たいんだよ。凍りつきそう」

▲ここは、ラッカは朦朧としていて、眠りに落ちる前のうわごとのような対話のつもりだったが、ラッカは起き上がってしまい、少し表現が過剰。確かに、寝ているだけだと間が持たないのかもしれないが……。
　この対話は、ラッカはほとんど覚えておらず、レキだけが心に引っかかっている、というようなニュアンスだった。その辺りをもう少し文章で補足した方が良かった。

ラッカ「（朦朧と）レキ、体がどんどん軽くなって……私、ちゃんとここにいる？」
レキ「大丈夫、ちゃんとここにいるよ」
ラッカ「私……消えたくない……」
レキ「……消えたりしない。大丈夫だから」
ラッカ「ここに居たいの。私、どこにも行きたくない。（眼を見開き、哀願するようにレキを見る。譫言のように）ここに居て……いいよね？」
レキ「もちろん。ラッカはここに居ていいんだよ。ラッカは祝福された灰羽なんだから……」
ラッカ、かすかに微笑み、目を閉じる。レキの言葉が届いたのかどうか、定かではない。
ラッカ「レキは……ずっと……わたしを……たすけてくれた……」
レキの手を握っていたラッカの手から力が抜け、ベッドの上に落ちる。ラッカ、すーすーと寝息を立てている。
レキ「ラッカ……でも、ラッカにはもう、私は必要ないんだな……」
レキ、ぐったりとした姿勢で椅子に凭（もた）れ、広げた掌を見下ろす。他人には決して見せた事がない、触れたら崩れてしまいそうな、弱く不安げな表情。
レキ「みんな私を置いていってしまう……」
静かにドアが開けられる。ヒカリとネム、ラッカを起こさないように静かに入ってくる。レキ、戸口から顔を逸らすようにして立ち上がる。硬い表情。ポケットから煙草を出す。
ネム「様子はどう？」
レキ「まだ落ち着いてる。熱が出る前に薬が間に合えばいいけど」
ネム「薬で治るものなの？」
レキ「分からない。朝になって熱が引いてなければ、私が連盟に連れていく。事情を話して――――」
ヒカリ、話について行けず、たまりかねて
ヒカリ「レキ、レキは物知りだし、一人で何でもできるのかもしれないけど……けどね、全部背負い込むことはないと思うの

16

▲前のシーンとこのシーンと、僕の意図としては、ヒカリの楽天的な部分によって、暗い方に流れてしまいがちな場の空気が変化して、結果的にヒカリがレキたちを救っている部分もあり、そうやってバランスがとれているのだ、という事が言いたかった。前のシーンでは、ヒカリがレキの肩を掴むような仕草があって、その動きが少し急だったせいもあって、うまく伝わっていない感じだったけど、こちらのシーンはヒカリの表情も良く、そのあたりがうまく出ていて良かった。

（語尾、自信なさげに小さくなる）……。手伝える事は何でも言って。仲間なんだから」

レキ、肩の力を抜き、表情を和らげる。それは優しい安堵のようにも、投げやりな自嘲のようにも見える。

レキ「うん。悪かった。交代で看病しよう。しばらく見ててもらえる？」

ヒカリ、ぱっと明るい笑顔。

ヒカリ「もちろん」

レキ「ありがとう。少し仮眠する。何かあったら呼んで」

レキ、ヒカリとネムの間をすっとすり抜けて、部屋から出てゆく。ぱたん、とドアの閉まる音。ヒカリ、いざ任されてみると、何をしていいか思いつかない。

ヒカリ「えーっと……」

ネム、ラッカを起こさないように気をつけながら

ネム「氷嚢あるかな？足の怪我、冷やさないと。指の傷に包帯巻いて、上着も泥が乾く前に洗濯しなきゃ」

ヒカリ「うん。ええと、まず氷だ」

ぱたぱたとキッチンに駆けてゆくヒカリ。

●レキの部屋

暗い部屋。ドアが開き、廊下の光が床に長く延びる。銜え煙草のレキ、部屋に入り、後ろ手にドアを閉める。建て付けが悪いせいで、ドアの隙間から廊下の光が漏れ、部屋は完全な闇にはならない。ドアのすぐ脇に、古びた木彫の像が置いてある。破損がひどく、辛うじてヒト型のシルエットが判別できる程度。レキ、木像の顔の辺りにある亀裂に、吸いかけの煙草を挟む。目鼻も見て取る事ができないほど古びた像だが、そうすると煙草を銜えた人影に見えなくもない。レキ、ドアにもたれたまま木像に話しかける。

レキ「ラッカも……私の助けはいらないってさ」

レキ、もう一本煙草に火をつけ、自分で銜える。溜息のように煙を吐き出し

▲ここはカットされた（んだったと思う）。

▲木造のアップの時、顔が半漁人みたいでちょっとおかしかった。

▲一本のタバコを代わる代わる吸うように変更された。よく考えたら、このままだと、木像のくわえたタバコがつきっぱなしになってしまう。

レキ「落ち込む事ないさ……。良かったじゃないか。ラッカが罪憑きじゃなくなって」

木像の口元から、煙草の灰が落ちる。レキ、木像の煙草を床に捨て、踏みつける。

レキ「……独りになるのは慣れてる……。この7年間、ずっとその繰り返しだったじゃないか」

レキ、左手のドアを開ける。寝室と逆のドア。部屋の中は暗くて見えないが、レキが部屋の中に姿を消すその一瞬、部屋の床に、絵の具が塗りたくられているのが辛うじて判別できる。何が描いてあるのかは全く分からない。ドアがバタンと閉められる。

原稿用紙200字詰め74枚

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第09話　井戸・再生・謎掛け

第2稿（2002.08.21）

○登場人物

ラッカ
ネム
レキ
ヒカリ
カナ
トーガ（セリフなし）
話師

●サブタイトル

●グリの街からオールドホームに向かう道

遠景。月も星も見えない闇の中、重く雲の垂れ込めた夜空から舞い落ちる雪。時折吹く強い風に、雪片が、まるで魚の群れのように一斉に向きを変え、流されてゆく。吹雪くほどの雪ではないため、まだ道には積もっていない。遠くに小さな光点。自転車のブレーキの音。コートを着込んだカナ。道端に自転車を止め、自転車にまたがったままラッカを呼ぶ。

カナ「ラッカー！」

風にかき消される声。

●風の丘

懐中電灯を手にしたネムとヒカリ。ゴトン、ゴトン、と、せわしなく回転する風車。風車の羽根が風を切る甲高い音が風に混じる。

ヒカリ「ラッ……きゃっ」

突然の強風が、ざあっと足元の草を逆立てる。見えない何かが草原を駈け抜けていくかのように、風は草を薙ぐように風の丘から西の森へと吹き抜けゆく。不安げな表情で風の過ぎた先を目で追うヒカリ。懐中電灯の光が草を照らして近づいてくる。ヒカリ達と逆方向から歩いてきたレキ。ヒカリ達と合流する

レキ「いた？」

ネム　首を振る。ヒカリ、空を見上げて

ヒカリ「雪……ひどくならないといいけど」

レキ　靴底でぬかるんだ地面を軽くこする。

レキ「大丈夫、これは積もる雪じゃない。きっともうすぐ止むよ……」

レキもぼんやりと空を見上げる。風は強まったり弱まったりしながら吹き続けている。

▲ここから、ラッカの井戸の中でのモノローグ、トーガとのやりとりは決定稿と変わらない。

クウ『――――（言葉として聞き取れないような幽かな笑い声のような囁き）』

ラッカ「……クウ！？」

弾かれたように身じろぎするラッカ。足を引き摺りながら壁に駆け寄る。壁に耳を寄せようとして、無意識のうちに壁に触れてしまう。

ラッカ「！……冷たい……」

驚き、反射的に手を引くラッカ。呆然とした表情で、壁と手を交互に見る。指先が震えている。不意に、どこかでガサッという葉擦れの音、鋭い声。

声「何をしている！」

驚くラッカ。振り返ると少し離れた壁の傍に、灰羽連盟の話師が杖を手に立っている。ずっと奥の茂みを越えてやって来たようにも、壁の基部の石積みの起伏の影から突然現れたようにも見える。足早にラッカの方に歩いてくる。

話師「壁に触れてはならない。この森に入るなと言われなかったか？」

話師、ラッカと壁の間に立って杖をかざし、足元の地面をとん、と杖で突く。気圧されるように壁から離れるラッカ。足を引き摺り、たたらを踏む。

話師「足をくじいているのか、靴はどうした？」

ラッカ「……井戸の中です」

話師「井戸……落ちたのか。大怪我でなくて良かった。これを使いなさい」

と、杖を差し出す。

話師「歩けるか？オールドホームの灰羽だな？名前は……ラッカ」

ラッカ「……はい」

ラッカ、杖をついて、挫いた足を浮かす。痛そう。

話師「歩けないならここに居なさい。人を呼んでこよう」

ラッカを手で制し、立ち去ろうとする話師。心細さから、慌てて話師の後を追おうとするラッカ。

ラッカ「平気……です」

痛みに顔をしかめ、杖を支えに、危なっかしく歩き出す。

7

●西の森

話師とラッカ、並んで森を歩いている。

ラッカ「……それで、トーガを追っていたら迷ってしまって……」

話師「……井戸から助けられた事はやむを得んが、トーガとは接触してはならない。トーガと話をしていいのは話師の資格を持つものだけと決まっている」

ラッカ「クウが……友達が、壁を越えたんです。それでトーガなら、何か知ってるんじゃないかと思って……そうだ！クウの声を聞いたんです。壁の中から……」

話師「それはお前の心が生んだ幻だ。巣立った仲間を思う気持ちを、壁が鏡のようにお前に見せたに過ぎない。……壁を越えた仲間の事をあまり心に浮かべてはいけない。その者の心がうまく街から離れられなくなる。壁を越えた者は壁の外で暮らす準備ができたと認められた者だ。だから心配はいらない」

ラッカ「……街の外には何があるんですか？」

話師「知りたいか？」

ラッカ「はい」

話師「では巣立ちの日に備えなさい。時が来れば、背中の羽が、お前を壁の外へと運んでくれるだろう」

ラッカ、羽袋の中の黒い羽を強く意識する。

話師「それよりも、何故井戸の中へ？」

ラッカ「……井戸の底で、鳥が死んでいるのを見つけたんです」

話師「それだけの事で、危険を冒して井戸の底に降りたのか？」

ラッカ「……私、この街に来てからずっと、鳥が、私の事を呼んでいたような気がしてたんです。（悲しげに）……うまく言えないけど、あの鳥は、私のせいで死んでしまったような気がするんです。私が間違った事をしたから、あんな風に、冷たい骨になって……」

8

話師「鳥はこの世界で自由に壁を越える事を許されている唯一の生き物だ。鳥が灰羽の失われた記憶を運ぶという言い伝えはある。……鳥の骸を見たとき、お前は戸惑いを感じたか？」

ラッカ「……いいえ」

話師「ならば、その骸は、お前が知るべき事を知った事の証だ。鳥は与えられた寿命を全うし、役目を無事終えた事を誇りに思っておお前に骸を見せたのだ。悲しむ事はない」

ラッカ、考え込み、いつの間にか立ち止まってしまう。

話師、ラッカを置いて数歩歩く。背後で、からん、という音。話師、振り返る。ラッカの足元に杖が転がっている。ラッカ、顔を伏せ、両手で顔を覆い、泣いている。肩が小刻みに震える。

ラッカ「（泣きじゃくりながら）でも……鳥が私に伝えてくれたのは、私が眠の中で見た夢の、本当の意味なんです。井戸の底で、夢を見たの。その夢が、いつか、どこかで本当にあった事なら、あの鳥は、私が知っていた誰かなの。なのに私……その人を傷つけてしまった。その人がどれだけ私の事、心配してくれてたのか、分かろうともしないで……」

話師「思い出せない誰かの事を、何故それほどまでに悲しむ」

ラッカ、手で顔を覆ったまま、いやいやをするように首を振る。悲しみに呑まれ、混乱している。

ラッカ「分からない。でも、私は間違った事をしたんです。とてもひどい事を……」

話師、ラッカの方に歩み寄り、身を屈め杖を拾う。ラッカ、顔を上げる。両手の泥が顔につき、涙の後が筋になっている。話師、杖を持った手で傍らの切り株を指し示し（杖を指示棒のようにするのではなく）

話師「座りなさい。そして落ち着いてゆっくりと話なさい。それはとても大切な事だから」

ラッカ、挫いた足を庇いながら、膝丈ほどの切り株の端に、おずおずと腰を下ろす。傍らに立つ話師。

ラッカ「……（いくぶん落ち着いた口調で）……ここじゃ。ない、どこか、知らない場所で、私はずっと、自分は独りぼっちなんだと思い込んでました。自分がいなくなっても誰も気にしてもくれないって……。私、自分なんていなくなってしまえばいいって思いました。消えてしまいたかった……。そうしたら、鴾の中に……。でも、思い出したんです。夢の中で、鳥が、私を助けようとしてくれた。私を心配してくれた誰か。」

話師「そんな風に考える事はない。鳥の話はあくまでも象徴だ。お前がどこからやってきたのかは、誰も知る事はできない。だが、お前に羽と光輪が与えられたのは、お前にこの世界で償うべき罪が無いことの証だ。灰羽とはそう言う存在だ」

ラッカ「でも、私は……。私の羽は……」

話師、じっとラッカを見下ろす。低い声で

話師「罪悪感か……。薬で羽を染めて罪の気を霧散させているな。その方法を誰に聞いた？」

ラッカ「……」

口ごもるラッカ。話師、何かを理解したように、呟く。

話師「そうか……。」

顔を上げるラッカ。哀願するように

ラッカ「罪悪って、何なんですか？私は罪人なんですか？」

話師「お前自身はどう思う？」

ラッカ「……以前は灰羽になった意味なんて、考えた事なかった……。今は、私は悪い事をしたのに、間違ってここに連れてこられたんじゃないかって……」

話師「罪悪感は、皆そういう思いに囚われる……。悪い夢に囚われ、償う術のない罪悪感が心の中に根を張ってしまう」

ラッカ「夢……。あれは本当の事なんですか？私は本当に……」

話師「それを確かめる術は無い。鴾の夢の中で何かを失っても、それは取り戻せない。誰かを傷つけたとしても、その者と再び見（まみ）える事はない。償う術は、奪われている」

ラッカ「……私、どうすれば……？」

俯くラッカ、ぽつりぽつりと、たどたどしく言葉を選びながら話す。

ラッカ「私が何か、悪い事をしたなら……本当はここに居ちゃいけないのなら、どこか、私のいるべき場所へ連れていって下さい。ここは……この街は、私には幸せすぎます。街の人も、灰羽の仲間も、みんな優しくて、誰からも大事にされて……。いたたまれないんです。もし私の見た夢が本当の事なら、私、帰りたい……。帰って、謝らなきゃ……」

ラッカ、また泣き出しそうになる。話師、ラッカの頭をなでる。大きな、鞠だらけの手。話師を見上げるラッカ。

ラッカは、ただ謎めいていて不気味だった話手を、今は恐ろしいと感じていない事に気づく。遠くで見ていた時より、ずっと年老いて、疲れている。話師、ラッカの顔を覗き込むようにして

話師「罪を知る者に罪は無い」

ラッカ「えっ？」

話師、傍らの機にもたれる。木々の間を縫うような細い道の端で、並んで同じ闇を見る二人。

話師「罪悪きの少女と白いトカゲの物語をしよう。……昔、あるところに一人の灰羽の少女が生まれた。心の優しい子だったが、黒い髪と黒い羽のせいで、その子はいつも孤独だった。見えない罪を背負わされて、いつも暗い眼をしていた。」

ラッカ、上目遣いに、隣に立つ話師の顔を覗き見る。仮面に隠れて表情は見えないが、実在する誰かの話をしているように、ラッカには見える。

話師「ある日、少女は自分が罪人になる夢を見た。泣いている少女の前に、一匹の白いトカゲが現れて、少女に言った。『罪を知る者に罪は無い』と」

ラッカ「罪を知る者に……罪は無い……」

話師「そして問うた。『汝は罪人なりや？』と。……お前なら、何と答える？」

ラッカ、しばし考え込み

ラッカ「私は……鴾の夢が、もし本当の事なら、やはり罪人なのだと思います」

話師「その少女も同じ答えを返した。するとトカゲは言った。『ではお前は罪を知る者である』と。少女は、自分の罪が消えたのだと思い、とても嬉しくなった。……トカゲは次の日も現れ、同じ事を少女に聞いた。『罪を知る者に罪は無い。では汝は罪人なりや？』。少女は胸を張って言った。『私には罪は無い』と。するとトカゲは牙を剥き出しにして笑い、少女に言った。『罪を知らぬ者、ならば汝は罪人である』」

ラッカ、自分も同じ答えを思い浮かべていたらしく、トカゲの返答を聞いてはっとし、目を伏せる。

話師「少女は泣き続け、泣き疲れて眠った。夢の中にトカゲが現れ、もう一度聞いた。『罪を知る者に罪は無い。では汝は罪人なりや？』――――。さて、何と答える？」

ラッカ「私は……（目を伏せ）分かりません……だって、罪が無いと思ったら、罪を負ってしまう……」

話師「これは罪の輪という謎掛けだ。そして罪に悪かれるという事の本質でもある。罪の在処（ありか）を自分に問い、同じ輪の中を回り続けて、いつか出口を見失う」

ラッカ「……どう答えればいいんですか？」

話師「考えなさい。答えは自分で見つけなければならない」

●西の森、入り口

森を抜ける。オールドホームよりもずっと南。すぐ右手には川があり、沼へと続いている。壊れかけた木の橋があり、その先には廃道が北東へ延びている。街とオールドホームを繋ぐ道の南端。

話師「私がついてやれるのはここまでだ。杖を貸すから気をつけて帰りなさい」

杖をつき、数歩歩き出すラッカ。立ち止まり、話師を振り返る。

ラッカ「また、話をしてくれますか？私……答えを見つけたいんです」

話師「……今は帰りなさい。お前は傷を癒す必要がある」

ラッカ「でも……」

食い下がるラッカ。話師、溜息をつき

話師「……いずれ、杖を返してもらわなければならんからな」

振り返り、森へと歩き出す。

ラッカ「あ、ありがとうございます」

と頭を下げるラッカ。

話師、森の入り口でふと足を止め

話師「……お前は、物語の少女に良く似ている」

ラッカ、びっくりして顔を上げる。だが、話師の姿はもうない。

▲以下、レキたちとの再開、ラッカを連れてオールドホームに帰り、ゲストルームでのレキとラッカの対話は決定稿と変わらず。

●レキの部屋

暗い部屋。ドアが開き、廊下の光が床に長く延びる。銜え煙草のレキ、部屋に入り、後ろ手にドアを閉める。建て付けが悪いせいで、ドアの隙間から廊下の光が漏れ、部屋は完全闇にはならない。ドアのすぐ脇に、古びた木彫の像が置いてある。破損がひどく、辛うじてヒト型のシルエットが判別できる程度。レキ、木像の顔の辺りにある亀裂に、吸いかけの煙草を挟む。目鼻も見て取る事ができないほど古びた像だが、そうすると煙草を銜えた人影に見えなくもない。レキ、ドアにもたれたまま木像に話しかける。

レキ「ラッカも……。私の助けはいらないってさ」

レキ、もう一本煙草に火をつけ、自分で銜える。溜息のように煙を吐き出し

レキ「落ち込む事ないさ……。良かったじゃないか。ラッカが罪悪きじゃなくて」

木像の口元から、煙草の灰が落ちる。レキ、木像の煙草を床に捨て、踏みつける。

レキ「……独りになるのは慣れてる……。この7年間、ずっとその繰り返しだったじゃないか」

レキ、左手のドアを開ける。3話で、ラッカが開けようとしてレキに止められたドア。部屋の中は暗くて見えないが、レキが部屋の中に姿を消すその一瞬、部屋の床に、絵の具が塗りたくられているのが辛うじて判別できる。何が描いてあるのかは全く分からない。ドアがバタンと閉められる。

床の上の煙草の灰が、かさっと揺れる。床の中から、半透明のなにかが、ぬるりと現れる。体長7センチほどのトカゲ。実体化すると、体の色は半透明からはっきりとした白になる。ややオレンジがかった赤い瞳で、レキが去ったドアの方をじっと見ている。

原稿用紙200字詰め25枚

▲最後のシーンのトカゲは、2稿と3稿にだけ書かれている。意味合いとしては、7話のツミの実形のようなものと言えるかもしれない。この時は、漠然と最終話でレキを救うためにラッカが超えなければならない障害となるべきものの始まりの形、と考えていた。

決定稿で削除したのは、このシーンでの非現実の存在は、レキが部屋に描いている絵の生々しい現実感を損なうと考えたから。

■DVDのおまけシール下絵。おまけシールなので、もっとディフォルメされた、漫画っぽい絵をオーダーされていたのだが、求められているものがいまひとつピンとこなくて、結局全部いつものタッチで描いてしまった。

■カラーページについて。

説明を入れる場所がなくて、結局最後のページになってしまいましたが、カラーページの絵について、少し補足しておきます。

この物語が終わった後のラッカを描いてみました。物語中の時間の経過と、僕自身がこの物語を描いてから4年近くが経っている事を考えて、少し大人びた印象にしてみました。

最初は、この作中の世界のままのラッカを描こうと思ったのですが、自分の中で完結した物語のキャラクターは、似せることはできても、やはり当時と同じ気持ちで描く事はできません。そこで、逆に今の自分の気持ちに正直な絵を描こうとしたら、自然と少し大人になったラッカが浮かんできました。

灰羽連盟という物語は、僕の中でしっかりと完結した物語であり、同時に当時の自分自身の内面を強く反映した作品でもあります。

4年前に物語を書き終えた時には、書かなければと思っていたテーマについて、自分にできる最大限の力を使って書ききった、という気持ちと、思いついた舞台や設定を13話で使い切れなかったという気持ちとが半々でした。この世界について、描きたい事はまだまだあったのですが、このキャラクターたちの物語は、最良の形で完結していて、もう足す事は何もない、という思いが強く、続編の企画の打診は何度かあったのですが、すぐに書きはじめる、という気にはなりませんでした。

正確に言うと、上田プロデューサーから『続きやらねえ？』と言われたその日のうちに、双子の繭から生まれた灰羽や、西の職工人地区の人達などのキャラクターと、おおまかなプロットはできあがってはいました。

しかし、もし、もう一度この世界についての物語を描くなら、それはやはり自分の内面を強く反映したものでなくてはならず、僕自身の中で何か変化するものがない限り書くべきではない、という気持ちが強く、ずっと日延べにしてきました。

今回、8話と9話には新しい舞台や登場人物がほとんど出てこないため、収録できる設定画が少なくて申し訳ない、という安直な理由で、何気なく筆をとりましたが、描いてみて初めて、『ああ、あれからずいぶん時間が経って、自分の心もそれなりに変化したのだな』と気づきました。

もちろん、だからといってすぐに続きを書くと言うわけではないのですが、足がかりがひとつ見つかった、という気はします。

2006.07.22　安倍吉俊

奥付

灰羽連盟脚本集第六巻

発行責任者　ＡＢ／安倍吉俊

発行元　むてけいロマンス

発行年月日　２００６年08月13日

連絡先　abetc@mac.com

無断転用を禁じます